出エジプト記（一章～二〇章）
連続講解説教

始・二〇〇六年八月六日
至・二〇〇七年二月一四日

辻　幸宏

本説教集は、二〇〇六年・〇七年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思い、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

今後順次、他の書簡の説教集を印刷していく予定にしています。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊　公同書簡一　ヤコブの手紙
　　二　ペトロの手紙一
　　三　ペトロの手紙二
　　四　ヨハネの手紙一・二・三・ユダの手紙
　　ヨハネの黙示録
　　ヨハネによる福音書（一～五）

二〇二一年六月

辻　幸宏

「異国での虐げ」　出エジプト記一章一～二二節　　二〇〇六年八月六日

出エジプト記は、書名が表すとおり、囚われの身であったイスラエルがエジプトから脱出することが中心にあり、旧約の福音書とも呼ばれています。つまり出エジプトの出来事が、罪人として永遠の死に定められサタンによって捕らえられていた私たちが、イエス・キリストの十字架によってサタンと罪・死から解放され、神の子として永遠の生命の約束が与えられた福音と重ね合わせて考えることができるからです。だからこそ、私たちは十戒を朗読する時、毎回序文の言葉「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」も、確認します。出エジプトをもたらした神は、イエス・キリストの十字架により私たちをも罪と死から解放してくださいました。また、この十戒の序文を毎回告白することは、主の救いの前提に私たちが神の律法を守るものとされており、律法を守った結果救われているのではないことも確認します。

出エジプト記を読む時、創世記との関連も忘れてはなりません。出エジプト記は一章一～五節で、ヤコブと兄弟たちがエジプトにくださった次第が語られています。それから約四〇〇年の年月が経ち、ヨセフによってエジプトの国が飢饉から逃れたことすら知らない、いや知っていたとしてもそれを否定したい王が立っています。そしてイスラエル人は、寄留者の立場となっていました。これは言い換えれば、ヨセフがエジプトにおいて王に次ぐ第二の位にあり、本来であれば難民・寄留者として受け入れられる所が、特別待遇を受けていたことを明らかにします。つまりエジプトにおいてイスラエルは、神の約束の地から離れ異国に身を寄せている寄留者でした。

そしてこの寄留者としてのイスラエルの姿こそ、私たちの姿です。日本はクリスチャン人口が一％未満です。この地に私たちは寄留し、福音宣教のために仕えているのであり、私たちにはさらに目指すべき神の国があります。私たちの国籍は天にあります（フィリピ三章二〇節）。つまりキリスト者は、この世における人生がすべてではなく、主によって

完成される神の国における永遠の生命の希望があります。キリストが十字架の死から三日目に復活されたように、私たちもキリストの再臨の後、復活し永遠の生命の希望があります。ここに最高の希望があり、この素晴らしい喜びを、今、人々に宣べ伝えます。

イスラエルが寄留者として虐げを受けていたことを聖書は語ります（一章九節以降）。人は罪を持っているが故に、自分本位、民族意識、自国意識（愛国心）となり、他者を押さえ込もうとします。ここに神の国への希望があるキリスト者と、自己保身を願う為政者との間に隙間が生じます。ここに虐げ・迫害につながる要素があります。今の日本において、右傾化が進み、寄留者であるキリスト者は、信仰の故に虐げや迫害を覚悟することも求められています。そのために信仰の武具を備える必要があります（エフェソ六章一〇～二〇節）。別の言い方をすれば、戦後六〇年にわたり日本ではキリスト者が迫害されることなく、キリスト者として普通に生活することができてきたことは、主なる神がお与えくださった豊かな恵みであることを忘れてはならず、主に感謝しなければなりません。

しかしながら、聖書は、私たちに「ただ苦しみに耐えなさい」と語られているのではありません。主は、イスラエルを守り救ってくださいました。そのために、主に仕える助産婦をお与えくださり、イスラエルの子どもたちが殺されることから逃れさせるのみならず、殺されずに残った子どもたちの中から、イスラエルをエジプトから解放する指導者として、モーセを準備してくださいました。同様に主なる神は、私たちをただ苦しみ・迫害の中に投げ出されるお方ではありません。主は私たちのすべてをご存じです。そして主は、私たちを見捨てられることはありません。だからこそパウロは、次のように語ります。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」（Ｉコリント一〇章一三節）。

イスラエルの人たちがエジプトから助け出される日を待っていたように、私たちも神に

よって与えられる神の国の希望を覚え、日々、歩み続けていきましょう。

「神の守り」出エジプト記二章一～一〇節　　二〇〇六年九月三日

イスラエルは、ヤコブの時代にエジプトにくだってから約四〇〇年の年月を経て、民族として大きくなり、エジプトの王ファラオにとっても脅威となっていました。それ故に、ファラオは全国民に対して、イスラエルに生まれた男の赤ちゃんの殺害を命令します（一章二二節）。つまりイスラエルは、信仰の故にではなく、イスラエル民族の故の迫害が発生します。ナチのユダヤ人虐殺や、旧日本軍の朝鮮併合などにも見られるように、時の指導者は、自らの国民を守ると称して、他の民族をさげすみ、迫害を行います。

こうした民族的苦難の中にあるイスラエルに救いをもたらすために、主はモーセをお立てくださいます（一～二節、参照・六章一四～二五節）。モーセはレビ族の家に生まれます。

両親は、モーセが「かわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた」と聖書は記します。ここだけを読みますと、普通の親のように、生まれたばかりの赤ちゃんであるモーセをかわいがる両親の姿が見えてきます。しかし、使徒七章二〇節は、「神の目に適った美しい子であった」と語ります。つまり、主はモーセに対して特別の愛情を持っておられ、主による特別な加護がすでにありました。つまりモーセの両親が、モーセを愛し、迫害の故にこの男をサタンの使いであるファラオに渡すことがないように、主の御霊の働きがここにありました。

さらにヘブライ一一章二三節では、「その子の美しさを見、王の命令を恐れなかったからです」と語ります。つまり、主の御霊の働きが両親にあったからこそ、両親は主の加護

を信じ、迫害をも恐れず、主の真理を貫く戦う力が与えられました。これが真の信仰者の姿です。

迫害、あるいは権力ある人から睨まれることは、非常に恐ろしいものです。自分の力で解決し、戦い抜こうとすることなどできません。しかし私たちは、主が共におられること、主が私たちを守り、養ってくださることを信じる時、どのような苦しみ、困難をも乗り越える力が主から与えられ、主の御言葉に従い、主の御霊の働きに委ねるものとされます。

三か月が経ち、赤ちゃんを隠し通すことができなくなると、両親はさらに、主の加護にあり主の御霊に満たされていたため、主による知恵が与えられます。主なる神を信じるとは、ただ信仰を告白し、礼拝を守るだけではありません。日々の祈りに対して、主が必要な答えをお与えくださることを信じ、主がお与えくださる知恵に聞き従います（三節）。

姉であるミリアムは、弟モーセをじっと見つめています。家族は、モーセを捨てて、死んでも構わないと思ったのではなく、主の守りを信じた故に行動しました。

ここに現れたのが王女です。王女は、ファラオがエジプト人の幼子を皆殺しにするよう命令していることを当然知っていたことでしょう。しかも、ファラオの娘は、赤ん坊がヘブライ人の男の子であることを認めつつも、ふびんに思い、受け入れます。ここに主の導きがあり、加護がありました。さらに、自らの手では子どもを育てることなどありえない王女に対して、モーセの姉ミリアムは機転を利かせて、自らの母を乳母として紹介します。つまり、モーセは実の母の手元で、さらに王女に守られ、また王女からすべて必要な手だてを受けつつ、必要な教育を受けることが可能となりました。まさしく灯台下暗しです。

そして主は、モーセを、イスラエルをエジプトから救い出すリーダーとしてお立てくださいます。主のご計画は主御自身が歴史の中において、その計画を実現してくださいます。

この主なる神は、今、私たちと共にいてくださいます。主は、主イエス・キリストを私たちの罪の赦しをお与えくださった救い主と信じるすべての者と共にいてくださいます。そして、最終的に、すべてのキリスト者を救い、神の国に導いてくださいます。そのため

の主イエス・キリストの十字架と復活が、すでに私たちに与えられています。その主なる神が、私たちを永遠の生命につながる神の国に導いてくださいます。そうした約束の中にあっても、私たちは日々の生活の中にあって、様々な苦しみや悲しみがあり、あるいは迫害に遭うかもしれません。しかし私たちは主に不平不満をぶつけるのではなく、主が私たちと共にいてくださること、主が私たちを救い、神の国に導いてくださることを信じ、主の御声に聞き従った歩みを行っていくことが求められています。

「正義と現実」出エジプト記二章一一～二四節　　二〇〇六年九月一〇日

人は「理想と現実とはかけ離れている」、「理想ばかりを追い求めていてはダメである。もっと、現実に目を向けつつも、理想を求めるべきです。それは主が人を創造され、神の国の完成に向けて、すべての被造物を治めるものとしてくださったからです。しかし人は罪を犯し、「理想」＝「正義」と「現実」＝「罪」にギャップが生じました。

モーセも、主によって召され正義を貫こうとしつつ、現実とのギャップを覚えます。モーセは主によって召され、ファラオの王女の加護の下、教育も受けてきました。そしてモーセはイスラエルの解放のために主によって召されていました。そして四〇歳になった時、イスラエルを助けようと思い立ちます（使徒七章二三節）。エジプトの王女の子として罪の中歩むことを拒み、財宝にまさる恵みと信じて、イスラエルのため虐げを受けることも享受しました（ヘブライ一一章二四～二六節）。この行動は、罪のはびこっているエジプトの中にあって、主の正義を貫き、主のお与えくださる神の国を求めてのことでした。

この時モーセは、主のために、イスラエルのためにと思い、重労働を強いられている同

胞を助けようと立ちますが、その行動は同胞に受け入れられませんでした（使徒七章二五節）。最初に行ったことは、苦しめられている同胞を助け、エジプト人を殺します。次の日は、同胞の民が互いに争っていたため、仲介を行おうとします。しかし、同胞から、「だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。きのうエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか」と攻められました。モーセは、主による召しを受け、正義を貫こう、イスラエルを救い出し、イスラエルの先頭に立とうとの思いがあったのですが、その理想に対して、他のイスラエル人は、このモーセの理想を理解できませんでした。それどころか、モーセは自らの罪が暴かれ、逃げることとなります。

ここから私たちは一つの結論を得ることができます。私たちはキリスト者として、神の義を求めて行く必要があります。しかし同時に、私たちが今いるこの世の中の動きも理解しておかなければなりません。モーセが遣わされたのは、エジプトにあってイスラエル人は長い間、奴隷としての虐げの中にありました。そして、誰もその状態から抜け出すことができるなど思っていませんでした。モーセは神を信じていましたが、祈りも準備も行わずに行動に移しました。それが人々に理解を得ることができなかった理由です。

だからといって、エジプト人が行っていたような罪を、自分も行うことを、主が求めているのではありません。状況判断をすることが求められます。つまり、信仰とはただ信じて行動すればよいのではありません。主を信じ、主にすべてを委ね、主に祈り、準備を整えていく必要があります。必要な賜物は主が私たちに備えてくださいます。

ですから、私たちキリスト者はただ信じれば良いのではなく、学び続け、様々な知識を身につけ、世の中を理解し、どのような状況の中に置かれたとしても、主が何を求めておられるかを、的確に判断する能力を身につけておく必要があります。聖霊による主の働き、周囲の人々の状況をまったく無視して、正義を貫こうとしても、壁にぶつかります。

モーセは壁にぶつかり、ミディアンにおいて自らを省みる時間が与えられます。ミディアンにおける四〇年は無駄であったように思いますが、しかしモーセにとってはこの時間

が必要だったのです。モーセは最初の四〇年、信仰教育と共に、上に立つ王子としての教育も受けました。しかしそれは机上の空論であり、正義・真理を人々に語っても、人々はそれを受け入れませんでした。信仰・教理と生活が一致しなければなりません。

今の日本のキリスト教会、私自身にも、同じことが言えます。私たちは日本に住むキリスト者として召されています。従って主の御言葉に聞き従い、主の真理を受け入れ、主の教えに従い、正義と真理を貫かなければなりません。そして異教国日本にあって、明らかに主の御言葉に反する行いに対しては、その罪を指摘し、主の真理を語っていくことが必要です。しかしその一方、主の御言葉が真理だからというおごった態度を改め、主がこの日本にあって何を求められているかを祈りつつ、今この国の民がどのようにすれば真理に目を向けるかを探りながら、賢く語っていくことが求められています。

「主はご覧になる」出エジプト記三章一～一二節　　二〇〇六年九月一七日

目で見ることができず、何も奇跡が起こらない状態で、人が神を信じることはありません。私たちクリスチャンであっても、日々の生活に追われている時、神の存在を忘れてしまうことがあるのではないでしょうか。

モーセも、エジプトから離れてミディアンにおいて家族を持ってからすでに四〇年の年月が経っていました(使徒七章三〇節)。この間のモーセの信仰について聖書は記しません。しかし主なる神は、イスラエルを奴隷の状態から救われることも、またミディアンに逃れていたモーセのことも、一時も忘れられることなく、ずっと見守っていてくださいました。

四〇年前、四〇歳のモーセは、主の約束に従い、正義を貫こうとして、イスラエルの民を救い出すために立ち上がりました。しかし、イスラエルの民から指示されることなく、

かえって逃げることとなりました(二章一一～二五節)。祈りと主の御霊の働きを求めることなく、自分の力でイスラエルをエジプトから解放しようとするモーセの野望は、実現しませんでした。しかし四〇年が経ったこの時、モーセは、自分の力でイスラエルを解放することができるなどとは、夢にも思っていませんでした。しかしこの時、主はモーセに現れになられます。

モーセは、羊の群れを養っていましたが、通常だと来ることのない奥に、主の御霊に引き込まれるかの如くに、荒れ野の奥にたどり着きます。主は、ここで燃える柴の炎としてモーセの前に現れになります。主の顕現は突然訪れます。私たちが計算に基づいて推測し、その結果として主が現れるのではありません。キリストの再臨も同様です。主は、地上のすべてのものを支配しておられ、被造物の憶測や推論に基づいて働かれることはありません。

主なる神は、モーセに対してここが聖なる土地だから、履き物を脱ぐようにと命令されます(五節)。これには二つの理由があります。一つには、主がおられるこの場所が聖なる場所だからです。当時は、幕屋において主の御前に立つ時、聖なる場所として、履き物を脱ぐことが行われていました。第二に、主従関係をはっきりさせることからです。履き物を脱ぐことは、明らかに僕の身分であることを、相手に表す行為です。つまり、主なる神がモーセの前に現れになられた時、それは明らかに創造主であり、贖罪主である神と、被造物であり罪人である人間との違い、関係性をはっきりと示し、この主なる神に服従するものへと、主はその御力を示されます。

昨今、学校の生徒と教師との関係や上下関係が乱れています。こうした人間関係は、根本的には、主なる神と私たちとの関係が回復しなければ理解することができません。神と人間との関係がはっきり示されることから、十戒の第五戒「父母を敬え」が出てくるのであり、対人関係もしっかりとしてきます。現在の日本における問題は、キリスト教から人々が遠のいていることが一因でもあります。

絶対的な力を示され、創造主と被造物の関係を示された神は、同時にイスラエルのことをいつも見守っていてくださいます（七～九節）。人は、主なる神を語ろうとする時、得てして冷めた存在と見ます。それは、創造主であり、贖罪主である方が、絶対的な力を持っておられ、私たちはそれにひれ伏すことが求められていること。それに最後の審判においてすべてを裁かれる方であることが相まっていることでしょう。しかし私たちは、その主なる神が同時に、私たちのことを一時も忘れることなく見守っていてくださっていること、一度約束されたことは決して忘れられないこと、そして苦しみ叫んでいる民に助けの手を伸ばし救い出してくださることを、忘れてはなりません。そして、力を有し、愛なる神が、モーセをお立てくださいました。

この神が、今も私たちと共にいてくださり、私たちの日々の歩みを見守り、祈りを聞き届けてくださいます。そして主なる神の愛により、私たちは、御子イエス・キリストの十字架の贖いにより、すでに罪が赦され、救いへと導かれています。しかし同時に、主は何もできない取るに足らない私たちを用いて、福音を宣べ伝える者へと、押し出してくださいます。いつも私たちと共にいてくださる主の存在、主の御力、主の愛に、感謝と喜びを持って、主の御声に聞き、主の召しに従った歩みを行っていきたいものです。

「今も共におられる主」出エジプト記三章一一～二二節　　二〇〇六年九月二四日

主はモーセの前に現れ、改めてエジプトへ行きイスラエルを解放するよう命令されます（一〇節）。モーセにとっては突然の主の顕現であり、また突然の命令です。モーセは、エジプトから離れてから四〇年の月日が過ぎていました。今となっては、モーセはイスラエルの前に立つこともできる身分にはなく、イスラエル人からも忘れ去られていたことで

しょう。そうした不安がモーセの頭をよぎり、その思いが「わたしは何者でしょう」（一一節）との言葉に表れます。つまりモーセは、今から向き合うファラオやイスラエル人に対して、主の命令を成し遂げる自信はまったくありません。「不可能である」との答えが、頭の中にあります。もう一つ付け加えて言うならば、主の命じられることの重大性を、モーセは知っているからこそ、今の自分ではできないとの思いがあります。

しかし主はモーセに「わたしは必ずあなたと共にいる」（一二節）と答えられます。モーセにとって、主が一緒にいてくださるからと言って、人々が納得し、ファラオを説得することができるのか？と言った思いがあったでしょう。従ってモーセはさらに主に尋ねます。「……彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいません。……」（一三節）

すると主は「わたしはある。わたしはあるという者だ」（一四節）と答えます。主なる神は御自身の存在そのものを証しされます。主なる神とは、昔に遡っても「今、あるお方」であり、「今、あるお方」であり、そして未来においても「今、ある方」です。いつの時代にあっても、常に存在される方です。つまり主は永遠の方です。意味深い言葉です。しかし、私たちにとっても、イスラエルの民にとっても、漠然とした言葉に聞こえます。だからこそ、主は続けて、過去・現在・未来において存在されていることを、イスラエルの歴史に照らし合わせて語られます（一五節）。イスラエルにとっては、信仰の父であるアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、今モーセを遣わされていることを、知ります。主なる神の存在が、自分たちの歴史・生活の中で一致します。つまり、漠然と主なる神が今も共にいてくださると語るのではなく、イスラエルの歴史において働いてくださった神が、今も共にいてくださいます。

私たちにとってはどうでしょうか？　イスラエルの歴史、主イエス・キリストによる十字架の贖いの歴史、このことが私たちの信仰・神感と一致しているでしょうか？　私たちの日本の歴史を考えてみましょう。先週、信徒研修会において、朱基徹牧師の信仰の戦いを、私たちは御子息朱光朝長老の証しとして聞きました。そこに働いてくださり、朱基徹

牧師を支え、殉教の死まで信仰を貫くことをお許しくださった神は、そののち韓国教会を導き、大きな実りをもたらしてくださいました。その同じ神が、私たち日本キリスト改革派教会を創立に導きくださいました。その神が、今、私たちと共にいてくださると主はお語りくださいます。私たちは、主なる神が、私たちの生きているこの歴史の中に働いておられることを実感しなければなりません。今も、そして未来も、そして永久にです。主なる神の存在は、歴史の中にあります。そして主は、無限・不変・永遠の神です。

さらに言えば、イスラエルの人々は、四〇〇年の間、エジプトにあって苦しんでいました。主は助けてくださらないとあきらめていました。しかし、主はこの間もイスラエルを顧みてくださっていました（一六節）。決して忘れたのではありません。その苦しみをつぶさに見ておられました。だからこそ、今、イスラエルを解放してくださろうとします。

かつておられ、今おられ、永遠におられる主が、今モーセと共にいてくださいます。この主があなたを遣わすとお命じになられます。ここで、モーセがイスラエルを解放しようと立たされるのは、モーセの力の故ではなく、主なる神の御力の故です。モーセはその主の助けにより、必要な賜物が与えられ、主の働きに仕えていくことが、今、求められています。主の働きに仕えていく時に求められるもの、それは今共にいてくださる主の御力を信じることです。自分がイスラエルを救いに導くのではなく、主がイスラエルを解放してくださるのであり、モーセはこの主の偉大な御業を手助けることが求められています。

モーセを押し出してくださった主なる神が、今、私たちと共にいてくださいます。私たちは、主の御力を信じ、主のお与えくださる救い、神の国の祝福を目指して、歩み続けていきましょう。

「なぜ、私が……」出エジプト記四章一～一七節　　二〇〇六年一〇月一日

主は、イスラエルをエジプトから解放する者として、モーセに召しをお与えくださいました。この時、モーセは疑問を持ちます。人々は主の存在を受け入れるはずがなく、どのようにすれば、彼らが主を受け入れ、信じるようになるのか？　ヨセフの時代に、主がイスラエルをエジプトに送り出してから四〇〇年間、主の顕現がなかったためです。従って、イスラエル人は、今の私たちの周囲にいる人たちと同じように、神がいたとしても昔のことであり、現在はいない。いるのであれば、証拠を見せてみよ、と語ります。

主は、三つの奇跡により、人々が主を信じることができるようにお示しくださいます。主の奇跡には、主の意図があり、ここでも三つの奇跡がただ並んでいるのではなく、この三つの奇跡から主の意志を確認しなければなりません。

その第一は杖の奇跡です。杖とは、権力のしるしです。そして蛇とは、①エジプトでは知恵や癒のシンボルであり、礼拝の対象でした。②また天地創造時に、アダムとエバは蛇の誘惑により罪を犯したのであり、サタンを象徴するものです。つまり主は、サタンの象徴である蛇を自由に操り、支配する力をもっておられることにより、御自身の力を示されます。

次に重い皮膚病の奇跡です。この病気は、エジプトでも、イスラエルでも忌み嫌われており、罪人とされ、日常の生活・信仰共同体から閉め出されました（レビ一三章四五～四六節）。つまり、この病気を主が癒してくださることは、罪の赦しと共同体の回復を意味しています。

最後にナイル川の水を血に変える奇跡です。ナイル川は、エジプトの命そのものであり、すべての農作物を潤す水です。このナイル川の水が血に変えられることは、主がファラオ、エジプトの神々を討ち滅ぼし、イスラエルに永遠の生命を約束してくださっていることを示します。

つまり主がここで示されているしるしとしての奇跡は、ただ奇跡が三つ行われただけで

はなく、主なる神は、イスラエルをサタンから解放し、罪を赦して神の民として回復し、永遠の生命の約束をお語りくださることを物語っています。

しかし、モーセはこの後も、なぜ自分が召されたのかと、主に対して質問します（一〇節）。これは主の御力を信じていない不信仰から来る言葉です。モーセ自身が、主への全幅の信頼、信用、信仰をまだ持っていません。

現在においても、人々は、主を信じない理由として、しるしがないことを、語ります。しかし、歴史を通して働かれる主の御業に私たちは目を向け、そこにある意味を私たちは知らなければなりません。主イエス・キリストは、罪のない状態で十字架に架かられ、死を遂げられ、墓に葬られました。しかし墓に葬られてから三日目の朝に、復活されます。まさしくここで主がモーセに行われた三つの奇跡を通して示しておられる、サタンからの解放、神の民としての回復、永遠の生命が、キリストの十字架と復活・昇天によって示され、私たちにすでに与えられています。ですから、旧約の時代のように、別のしるしを私たちが求める必要はありません。

主なる神は、不信仰なモーセに対して、お答えくださいます（一一～一二、一四～一七節）。主はモーセの不信仰に対して怒りを露わにされます（一四節）。イスラエルをサタンから解放し、罪を赦して神の民とし、永遠の生命をお与えくださる主なる神にとって、不可能なことは何かあるでしょうか？　あなたが、今、この場に存在しているのは誰の力が及んでいるのですか？　神の発せられる言葉、神の御支配、神の教え、神の救いは、私たち人間が何もできないとしても、何事でも成し遂げる力があります。すべての出来事は、人に由来するものはなく、ただ神からのみ来ます。

私たちにとってすべて必要なものは、主がお与えくださいます。ないことに対する不平・不満を語るのは、すべてを成し遂げてくださる主にすべてを委ねていないからです。すべてを成し遂げる力を有しておられる主なる神の御声に、私たちは聞き従わなければなりません。

私たちが、すべてを主に委ねることにおいて、主は、私たちに必要なものをすべてお与えくださり、同時に、人々に対しても、救いの御業をお示しくださり、主による救いを受け入れる者へとお導きくださいます（参照・Ｉコリント一章二六～三一節）。

「神は語られる」出エジプト記四章一八～三一節　　二〇〇六年一〇月八日

神は、天地創造の前から、最後の審判にいたるすべてのことをご計画され、その計画に従って、歴史を形成されていることを、私たちは信じます。しかし同時に、すべてが計画されているのであれば、「私たちの意志はないのか」と言ったことが良く語られます。今日の御言葉では、そうしたことを覚えつつ、与えられた御言葉から聞いて行きたいと思います。

モーセは、エジプトを離れてから四〇年を経て、主から声をかけられ、エジプトにあって奴隷として虐げを受けているイスラエルを救い出すように命令されました。モーセは、自分にはそのような能力がないこと、誰が自分の声を受け入れてくれるのかと言った反論を行いますが、主は御自身を示され、さらにモーセに三つの奇跡を通して、御自身の力をモーセに示され、モーセを立たせました。

最初に、モーセはしゅうとであるエトロのもとに帰り、エジプトに戻ることを伝えます。しかし、主によって召しを受け、イスラエルを助け出すためであることは伏せています。理解してもらえないとの思いもあるからです。クリスチャンの間でも、世の中でも、隠し事はダメで、何でもかんでも明らかにしなければならない、との風潮が昨今ないでしょうか。確かにすでに行われたことが隠される必要はありませんし、隠し立てをしてはダメでしょう。しかし、主の御業としてこれから行われようとすることに対して、まだ人々に理

解できないことまで、すべてを明らかにすることはありません。主イエスも、十字架に架けられること、十字架の死から復活・昇天されることは、隠されていたわけで、実際に弟子たちにそのことが三度に渡って伝えられましたが、弟子たちはその時点で理解することはできませんでした。

一方、モーセが出発するにあたって、主は改めてモーセに対して言葉をかけられます。主はモーセに二つのことを語られます。一つは、旅立とうとするモーセに安心させる言葉です（一九節）。モーセは、エジプト王家において育てられていましたが、その王を裏切り、イスラエルを救おうとしました。そして命を狙われて、四〇年前、エジプトを脱出して来ていました。その王が亡くなったと言うことです。

それからもう一つ、これから向かおうとしているエジプトにあって、主がモーセに対して何を求めておられるのか、そしてそのエジプトにあってエジプト王ファラオはどのような態度に出ようとするのかが、主の預言として語られます（二一～二三節）。ここでも主がモーセをお守りくださり、心を頑なにするファラオに対しては、主が裁きをもたらされることを語り、モーセに主を信頼するように求めています。

そして、ここに注目すべき言葉が語られます。「わたしが彼の心を頑なにするので、王は民を去らせないであろう」。主がモーセを通して奇跡を行われ、ファラオが自らの心を閉ざして頑なになることを、主御自身の意志として行われると語られます。ファラオの意志、私たち人間の意志はないのか？　人間は、神の操り人形か？　しかし、現実に私たちが、主によって操られているとは思わないわけで、むしろ、主なる神の存在すら知らずに、自分勝手な行いを行っています。

実際ファラオの心がどのようであったかを聖書は記します（七章一三、二二節、八章一一、一五、二八節、九章七、一二、三四～三五節、一〇章二〇、二七節、一一章一〇節）。ファラオの心は、ファラオ自身の心が自ら頑なになる場合と、主がファラオの心を頑なにする場面があります。つまり、主なる神のご計画は、一〇〇％主の御意志としてなされま

すが、一〇〇％ファラオの意志において行なわれます。正直な所、私たち人間の頭で、すっきり整理ができるものではないでしょう。しかし、ここで考えなければならないことは、主なる神が創造者であり、無限・永遠・不変のお方です。それに対して、私たち人間の理解には限界があります。限りある者が、無限の広がりを持つ神の御業を一〇〇％理解することはできません。ただ私たちは、主がご計画され、預言されたことは、結果として一〇〇％成就することを理解しなければなりません。

また、主はモーセに対して、『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である』（二二節）ともお語りくださいます。ファラオは自分自身で頑なになり、罪の故に裁かれます。一方、イスラエルはわたしの子であると主は宣言してくださいます。イスラエルが、エジプトから助け出されるのは、神の子とされているからで、主の一方的な恵みによる救いです。

神の子であるしるしとして、イスラエルは割礼を受けることが求められます。二四～二六節でモーセが殺されようとします。これはイスラエルとして割礼を受けていなければならなかったモーセの息子たちが割礼を受けておらず、神の子としてふさわしくないことを示すためでした。そのため、モーセの妻ツィポラはとっさの判断で息子に割礼を施します。

こう見てきますと、人は、自らの意志において、主に逆らい、罪を犯すことにより、主から裁きを受けるのですが、主につながる神の子は、神の一方的な恵みによって、救いが与えられます。そのしるしとして、イスラエルの民は、割礼を授かることが求められます。新約の時代、現代に生きる私たちは、信仰を告白して、洗礼を授かることにより、その確認を行っています。そして、週毎に主の御前に集められ礼拝を献げることにより、また月一度の聖餐の礼典に招かれることにより、私たちが主によって救われていることを、確認します。

主のご計画は、私たちには計り知れません。しかし、主はご計画の通りに、モーセを召し、そして出エジプトの御業を成し遂げてくださいます。そして主なる神は、すべての神

の子である私たちクリスチャンを救いに導いてくださいます。そして、主は私たちが救われるための必要を、すべて私たちにお与えくださり、お示しくださいます。その救いの御業が、今、この私たちにも示されています。

「主の命令、王の命令」出エジプト記五章一節～六章一節

二〇〇六年一〇月二二日

先日、行われた定期大会において、教育基本法「改正」に反対する声明を出すことが、決議されました。この時、相当時間を費やして議論いたしました。教会がこのような抗議声明を採択することに対して、政治介入であるとの強い批判もあります。しかし今議論されている教育基本法が改正されることにより、戦中たどってきた国家主義教育が復活する道を開くこと、さらに思想・信条が侵害され良心の自由が奪われることにより、私たちキリスト者としての生活にも大きな影響をもたらすことを、私たちの教会は信仰の問題と捉え、政府に対して抗議声明を提出することとなりました。

この時一つの意見として語られたことは、「このような抗議声明を教会が提出することにより、教会が迫害の対象となる」との危惧です。この意見は、今のままでは戦前と同じ道を歩み、反対する者たちに対する迫害が起こるとの前提があります。しかし、抗議声明を出すのは、そのような時代にならないようにするためです。迫害が起こるから、声を出さないのであれば、私たちの信仰の立場、主なる神が私たちに何を信じ、何を求めておられようとしているのかということを忘れようとしているのでしょうか？

私たちは、今、この日本にあって、ごく少数のキリスト者として生きています。そのために、多かれ少なかれ地域の人たちとの摩擦もでてきます。迫害は避けたいです。そうした中にあって、私たちキリスト者は、どのような信仰生活を送らなければならないのか、今日の御言葉が語っているのではないでしょうか。

エジプトで奴隷とされているイスラエルを救い出すために、主によって召されたモーセは、兄アロンと出会い、エジプトの王ファラオのもとに出かけていきます。モーセは、主なる神の力を信じること、自分がその働きに召されていること、イスラエルの人々が自分に従うこと、そのいずれもが信じられないことであり、召しを与えられた主に対して、何度も何度も問い返しました。主は奇跡というしるしをモーセに与え、そして人々に言葉を伝える兄アロンと再会したことにより、モーセは主を信じました(三、四章)。

そしてモーセとアロンは、エジプトにおいて神とされていたファラオよりも高い位にイスラエルの神、主がおられることを語り、その主の命令をファラオに語ります。主なる神を信じることにより、地上における権力者に対する恐れは残っているものの、それ以上の力を有しておられるお方の守り、支えてを信じて行動する者とされます。

主がモーセを立て、モーセをファラオのもとにつかわせたのは、主がイスラエルを愛しておられ、イスラエルを奴隷の状態から救い出すことが目的です。その主の愛を私たちは、忘れてはなりません。

一方、地上で強力な権力を有していると自負しているエジプト王ファラオは、目に見えない主に対する恐れはありません。なぜ、目に見えない主に対して、自分が従わなければならないのかと問いかけます（二節）。そして自らの権力を守るために、自らの権力を奪おうとする者に対して、さらに虐げを行います(七～九節)。

権力者であれば、自分のさじ加減で何を行ってもよいのでしょうか？　権力者、為政者が立てられるのは、主御自身であり、御自身の栄光と公共善のためであり、善良な者は守り励ますことが求められています（ウェストミンスター信仰告白二三章一節）。さらに、上に立つ者は、奴隷である者たちに対して、愛をもって接しなければならないと聖書は語ります（コロサイ四章一、参照・ウェストミンスター大教理問一二九、一三〇）。

主の存在を受け入れず、己の権力にすがろうとする者は、主の御前に罪と宣言されることを繰り返します。そしてそういう状況の中でキリスト者である私たちの対応が問われます。ファラオによってさらに苦しみを覚えたイスラエル人は、まず、ファラオに嘆願いたします。ファラオはその誓願をまったく受け入れません。続けてイスラエル人は、モーセとアロンに対して訴え出ます。そしてその訴えを、モーセはさらに主に訴えます。主なる神は、このイスラエルの苦しみをご存じです。そして、あなたたちの苦しみを知っており、必ず解放すると宣言してくださいます(六章一節)。

私たちは、不義を行う者の報い・裁きは、主にお任せし、主に助けを祈りつつ、上に立つ権威者にも従うことが求められます(参照・コロサイ三章二二節)。それは、苦しむ民を主は知っておられ、助けてくださる信仰から来るものです。つまり私たちは、不正なことを行う為政者に対して、また誤った方向に向かおうとしている為政者に対して、第一にすべきことは、主の道に反していることを為政者に対して語り、不正の除去を訴え出ることです。それでもなお、為政者は不正を改めない時、その事実を訴えつつも、その罪の刑罰を主に委ね、主による助けの御手を信じて祈りつつ、為政者に従うことが求められています。

「主の命令と人々の反応」出エジプト記六章一～一三節

二〇〇六年一〇月二九日

主がモーセを立て、イスラエルを救ってくださろうとしていた時、イスラエルの民はどのように思ったでしょうか？神を知らない為政者が、神の言葉を信じないことは理解できます。しかしイスラエルは、アブラハム以来の主の約束の民です。そのイスラエルはヤコ

ブの時代から約四〇〇年が経ち、主なる神の臨在を信じる信仰から、言い伝えによる形だけの宗教に成り下がっていました。それは、創立六〇周年を迎えた日本キリスト改革派教会にも重ね合わせることができると思います。信仰の継承の問題です。しかしイスラエルの問題は、同時にファラオに反抗することを恐れ、力がそがれていたことも一因です。

主なる神は全能の神(エル・シャダイ)です(三節)。「何事でもなしうる能力を持った力ある神」です。過去・現在・未来において永遠・無限・不変におられる神が、今も力を有しておられます。イスラエルは、主から離れ、神を忘れていましたが、主はイスラエルと共にいてくださいます。

そして、主はイスラエルとの契約を覚えていてくださいます。それはアブラハムに対しての契約です(創世記一三章一四～一七節)。昔おられ、今おられ、永遠におられる主なる神は、永遠の存在であり、かつ全能なる方ですから、救いの予定を変更されることはなく、また救いの御業を成し遂げることが不可能なこともありません。約束し、契約を結んでくだされば、その約束を果たしてくださいます。

しかし、奴隷と化したイスラエルにとって、神との契約は、信仰が薄れたのとあわせて、忘れ去られていました。救いの約束を信じることと、信仰とは比例します。

しかし、主はイスラエルとの契約を覚えておられます(五節)。「わたしの契約を思い起こした」とは、あたかも一度は忘れてしまったが思い出したかの如く、擬人的に聖書は語りますが、主がイスラエルを救ってくださろうとしていること自体に変更はありません。

そして主なる神は、今、重労働の下で苦しんでいるイスラエルの民に、新たな救いの契約を結んでくださいます(六ｂ～七節)。虐げている者を裁き、あなたたちイスラエルを救い出すと宣言してくださいます。ここに抽象的な神がおられるのではありません。アブラハム・イサク・ヤコブの族長時代のイスラエルではなく、今苦しみの中にあるあなたたちイスラエルを救うと主は宣言してくださいます。「主があなたたちの神となり、あなたたちは主の民となります」。あなたは神の民としての刻印が押されています。救われるこ

とが約束され、新天新地の祝福が約束されています。ここに、割礼という形だけの信仰から、全知全能で、イスラエルを苦しみから救ってくださる生きて働く主なる神がおられます。この後、イスラエルの人々は、主のこの約束により、エジプトの奴隷の状態から救い出され、約束の地カナンに導かれます。イスラエルの民は、救いが提示されつつもその主の言葉を信じませんでしたが、主はその約束を果たしてくださいます。これこそが主の愛です。

ここでイスラエルに、そして私たちが問われているのは、主なる神への信仰です。人々は、目に見ることなく、直接耳にすることのない主なる神を信じることはありません。現実にしか目が行きません。しかし、十字架の死から三日目に復活してくださった主イエスは、釘の跡に手を入れなければ信じないと言った弟子のトマスに語られました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」（ヨハネ二〇章二九節）。私たちも、御言葉によって救いを提示してくださっている主を信じることが求められています。

イスラエルをエジプトの奴隷状態から救い出すと約束してくださった主なる神は、イスラエルが主の救いの約束を信じなかったにもかかわらず、その約束を果たしてくださいました。そして、その主なる神は、メシアとしてイエス・キリストをこの世に賜り、罪の赦しと救いのために十字架にお献げくださいました。この主なる神が、今、私たちに対して、信じて、神の刻印を受けた者が、新天新地、神の国、天国の約束をしてくださっています（黙示録参照）。私たちは、今、形だけ神を礼拝したり、教会から離れることではなく、約束を成就してくださるこの主なる神の救いの約束を信じて、主の御言葉に聞き従っていくことが求められています。

「賜物と役割分担」出エジプト記六章一四節～七章七節　　二〇〇六年一一月五日

ヤコブの子たちから始まる系図が記されています（一四～二七節）。創世記でも繰り返し系図が出てきましたが、聖書は重要な局面に差しかかる度に系図を記し、その人物がイスラエルに属する民であることを確認します。ここでも、主によって召され、エジプトでイスラエルを解放するモーセとアロンがヤコブの子レビの子孫であることを示す系図が出てきます。ここで、イスラエルの長男ルベン、次男シメオン、三男レビが語られ、後の兄弟たちが記されていないのは、焦点がレビの子孫であるモーセにあるからです。モーセがアブラハムの子として神の祝福を受け継ぐことを確認しています。また、ヤコブと子どもたちがエジプトに渡ってから約四〇〇年の年月が経っているにもかかわらず、モーセが四代目であることへの疑問も出て来ますが、聖書が「～の子」と語る時、「～の子孫」の意味でもあり、間の世代が省略されているからです。

ところで現代に生きる私たちはこの系図をどのように理解すれば良いのでしょうか？ヨハネの黙示録には、神の民たるキリスト者は、天国にある「命の書」に名前が記され（三章）、「神の刻印」が押されること（七章）が語られています。生きて働く主なる神がおられ、この主による救いを信じる私たちは、命の書に名前があり、目に見えませんが額には神の刻印が刻まれています。私たちは、その主の救いの約束を信じる民とされています。

その後、主は改めてモーセに対して、ファラオに語り、イスラエルを解放するようにとの召しを与えます。召しは一回限り劇的に起こるだけではありません。時として繰り返し語られることにより徐々に信仰が与えられ、主の働き人へと変えられることもあります。

しかしモーセは、改めて主の召しを拒絶します。「割礼のない者です」（三〇節）とは、「口べた」（新改訳）なことで、「主からの賜物が与えられておらず、その働きに適さない者です」といった意味が込められています（参照・四章一〇節）。モーセも一人の罪人に

過ぎず、この人間的な弱さは、私たち自身の弱さです。

しかし主なる神は、こうしたモーセの態度に対しても怒ることはいたしません。子どもをあやすように、主はモーセに対してさらにお語りくださいます。神を知らない人の中には、主なる神のことを、最後の審判においてすべてを滅ぼす恐ろしい神であるとの勝手な判断があります。しかし主なる神は、あなたが己が罪を受け入れ、悔い改め、主なる神を信じ、主にすべてを委ねて従うことを常に求めておられます。主なる神が、忍耐強くあなたのことを待っていてくださるのに、主の御心を知らずに、主がどういうお方であるかと決めつけることこそ、罪深いことです。

そして主はモーセに対して預言者アロンをお与えくださいます（七章一節）。主は、モーセを召しつつ、モーセ自身が人前で口が立つ者でないことをご存じです。いや主御自身が、モーセに、そうした賜物をお与えになられていません。主が口の立つ賜物を与えられたのはアロンです。つまり主は、モーセ一人にすべての働きを行うように命じられたのではなく、主はモーセを立てられたように、アロンをもお立てくださいました。

主は、創造者であり、人々に命をお与えくださいます。そして、すべての人に性格、特技を、主が賜物としてお与えくださいます。万能な人など誰一人いません。互いが欠けのある人間、罪のある人間として、主の御前にその弱さを覚えます。だからこそ、教会・家族・またどのような集団においても、役割分担が求められ、それぞれの欠けを補い合うことが求められています（参照・Ｉコリント一二章一二～二六節）。

モーセは、主の代理者として、ファラオの前に立ち、本当の王である主の権力を示すために立てられました。だからこそモーセは、自分自身を神と称しているファラオの前にも対等に立つことができ、また主の働きを全うすることができる者とされ、主の権威を示すために、主の語る御言葉にひれ伏すようにファラオに語りつつ、奇跡を行います。

モーセが、繰り返し主の召しに対して、辞退を願い出ながら、主がモーセにその働きを担うのは、主なる神が共にいてくださり、必要な力、賜物、そして奇跡を行う力をお与えくださるからであり、さらに、すべてをモーセ一人に委ねるのではなく、イスラエルの民に語る使命をアロンに与え、モーセの重荷を取り除いてくださいます。

主なる神は、モーセの弱さ・欠けをご存じであり、受け入れてくださったように、私たち一人ひとりのこともすべてご存じです。そして主は、救いの御手と賜物を私たちにお与えくださっています。だからこそ私たちは、主を信じること、そして主が必要な賜物をお与えくださること、さらに欠けのある部分を補う者を主がお与えくださることを信じて、私たちは主の働きのために召されています。

「権威と命を司る方」出エジプト記七章八節～二四節　　二〇〇六年一一月一二日

神を信じない人たちの中に、「証拠を示せ」、「奇跡を見たら信じる」と語られる方もいます。しかしそういう人たちは、キリストの姿、主の奇跡を見たとしても、神の存在を受け入れることはできず、心を頑なにします。今日与えられた御言葉には、奇跡を見ながら心を頑なにしていくファラオの姿が描かれていきます。

ファラオの前に立つモーセはすでに八〇歳です（七章七節）。モーセの生涯は一二〇年であり、老人に域に入っています。聖書はこの時のファラオの年齢を記しませんが、一般的に言って、ファラオにとってモーセは、「老いぼれ」に過ぎません。そしてファラオは、「自分こそが王であり、すべての権力を持っている。誰の声も聞く必要はない」とも思っていました。ましてや老いぼれの言うことです。だからこそモーセに対しても、奇跡をやれるならやってみよとの思いがあります。そこでモーセは主の命じられるまま、奇跡を行います（八～一一節）。

「杖」とは神の怒りを表す時にも用いられ、罪の故に人を懲らしめる時に使われます

（サムエル下七章一四節、ヨブ二一章九節、イザヤ一〇章五節、三〇章三一節）。そして再臨された主イエスは、「鉄の杖」をもって全世界の民を治められます（詩編二編九節、黙示録二章二七節、一二章五節、一九章一五節）。また羊の数を数える時にも使われ（レビ二七章三二節）、神が選民を数える時にも使われます（エゼキエル二〇章三七節、黙示二一章一五～一六節）。つまり「杖」は、聖書では一貫して権威を象徴しています。一方「蛇」は、創世記の最初にエバをだまして善悪の知識の木から木の実を食べさせましたが、サタンを象徴する動物です。従って、主なる神が、杖を蛇にすることができ、またそれを自由に操ることができることは、主がサタンをも支配しておられる権威者であることを語っています。

しかしこの奇跡を、エジプトの魔術師も同じことを行います。このことに関し、当時は同じことを行う力が彼らにはあったのか、何かのトリックを用いたのか、分かりません。しかしここで重要なことは、アロンの杖がエジプト人の杖をのみ込んだことです（一二節）。つまり主の御力が、いかなる人間の業に勝るものであることを、ここで語ります。

しかし、「神のしるしとしての奇跡を見せよ」と語るファラオは、奇跡を信じて神を受け入れることはなく、心を頑なにします。心の中に罪のある人間は、奇跡を示されても、神を信じることはなく、真の救いに導かれる者は、このような奇跡を直接見ることがなくとも、主が語られる御言葉を受け入れ、信じることができる者とされます。

そして主はモーセを通して一〇の奇跡をファラオに示し、主の御力を示していきます。最初の奇跡が血の災いです。「水」とは清めの意味があり、教会でも洗礼式の時、水をしるしとして用いますが、罪を洗い清めることを意味します。特に、エジプトにおいてのナイル川は、すべての生命の源です。すべての水をナイルから得ているわけで、飲み水だけではなく、農作地、家畜にもすべて水が必要です。その川を血に染めます。ですから、それはエジプトのすべての命を奪うことを意味しています。つまり、主はすべての命を奪うこともできるお方であることを、この奇跡を通してファラオに示します。全世界を血に染

めることができるお方は主お一人であり、この方がすべての命の源です。このお方がお許しにならない限り、今に生きる私たちも、今日の命も保証されません。このことをお示しになるために、最初の奇跡として、血の災いを主は行われたのです。

しかしファラオはさらに心を頑なにします。人の頑なさは、自分がすべてであり、他の者からの何一つ聞こうとも見ようともしないからです。人を見下しているからです（参照・マタイ一三章一四～一五節）。多くの人々はこの頑なの中に生きており、いくら主の御言葉が届けられても、主の奇跡がもたらされても、受け入れられず、信じることもできません。

しかし今日の御言葉において示された奇跡が語るように、今も生きて働く主なる神は、すべての権威をもっておられ、すべての被造物、すべての人間の命を治めておられます。だからこそ、私たちは、心を頑なにして、永遠の死、永遠の死に向かうのではなく、主を受け入れ、主に従い、罪の赦しと永遠の生命の約束につながることが求められています。そして主の御言葉に聞き従う者は、同時に、遜り謙遜となり、人の話しを聞き、受け入れる広い心を持つ者へとされていきます。

「真実の神と神もどき」出エジプト記七章二五節～八章一五節

二〇〇六年一一月一二日

今日の社会では、本物そっくりの偽物が氾濫しています。「もどき」です。たとえば食品サンプルなどは見た目だけですと本物と間違うようなものがあります。しかしこの場合、手で触ったり、食べようとすると偽物であることは明らかになります。サンプルにはそのようなことまで似せる必要がないからです。まさしく似て非なるものです。

このもどきものが神にもあります。「神」と呼ばれるお方はお一人、主なる神だけで、他に神と呼ばれているものは、「もどき」です。それが偶像です。私たちは、この真実の神と、神もどきの偶像との違いを認識し、真に神を求める必要があります。

さて今日の御言葉では、主がエジプト王ファラオに行われた一〇の奇跡の内の二番目、三番目が記されています。主が奇跡を行われるのは、ファラオがイスラエルを奴隷から解放することが最終的な目的ですが、それと同時に主こそが力がある唯一の神であり、他の神々は「もどき」にすぎないことを示すためでもあります。

最初は蛙の奇跡です。蛙は、エジプトでも珍しい動物ではなく、むしろ水中に無数に生息する蛙が多産であることから豊穣のシンボルとして神格化されていました。ですから、エジプトで神とされているものに対する主の挑戦です。神格化された蛙でも、領土全体に、王宮にも、寝台にも、食事場までも襲いかかってきます。足の踏み場もない程、寝る場所もない程です。こうなると神格化された蛙とて、ファラオは完全除去を求めます。明らかに神としての地位を失います。

この時同時に、魔術師の限界も示されます。魔術師は同じように蛙を出しますが、しかし除去することはできません。ファラオもそのことを理解していました。トリックに過ぎなかったからでしょう。だからこそファラオは蛙の除去をモーセに頼みます(八章四節)。

モーセが「いつか」との問いに、ファラオは「明日」と答えます。これは主の力が示され、神もどきの蛙・魔術師のメッキがはがれても、なおも頑ななファラオの姿です。「今すぐ」にでも除去して欲しい蛙を「明日」と語るのは、なおも魔術師に望みを置いていたからです。主に従うことができない人間の姿・あがきがここにみられます。それは、蛙が除去されてもなおです。「民をさらせる」との約束は反故にされます。

つまり真実・力ある主なる神が示され、一方ではメッキがはがれ、さびた状態が露わになっている偶像が明らかになっても、人は自分を変えることができません。

続けてぶよの奇跡が行われます。ぶよとは、蚊、のみ、うじのようなものでしょう。一

匹いてもうっとうしいぶよが大量発生します。ここで注目すべきことは、魔術師の態度です。魔術師は秘術を用いて同じようにぶよを出そうとしますができません。そして自分たちが神でないことを明らかにします。そしてさらに魔術師は、「これは神の指の働きでございます」と主の御業を受け入れます。真実を求めようとするものは、真実が示されると己の限界を知り、また真実の力を見抜くことができるものとされます。そして魔術師はこれ以後、モーセの前から消えて行き、主に対抗しようとしません。もどきの神は、嘘が明らかにされ、主に屈服させられていきます(参照・Ⅱテサロニケ二章九～一二節)。

こうして、魔術師が逃げて行き、裸の王様となったファラオがいます。彼は頑なです。しかし、主は「だから彼は負けた。ダメだ」とは切り捨てられません。主が真実に求めておられることは、もどきが明らかにされ、真実の神が示されたのだからこそ、何もない己をさらけ出し、主の御力を受け入れ、主を信じ、主に従うことです。己の罪を悔い改めることです。だからこそ主は、罪の赦しをもたらすため、御子イエス・キリストをこの世に賜り、律法に仕え、私たちの罪の刑罰を十字架に負うてくださいました。何もなくなったからダメなのではなく、何もないからこそ、主に求め、主を信じて歩むことが求められています。

「神の恩恵と裁き」出エジプト記八章一六節～二八節　　二〇〇六年一一月二六日

主がエジプトにもたらす一〇の奇跡の内、最後の奇跡を除く九つは三つのサイクルに分けられます。そして第四の奇跡から第二サイクルとなります。第一サイクルでは、主なる神の御力が強く示され、偶像が無力であることが示されました。第二サイクルでは、主権者なる主に逆らうことによる裁きと、主によるイスラエルの一方的な救いが語られます。

ところで、第四の奇跡「あぶの災い」に関しては、第三の奇跡で出てきますぶよとも似通っているかと思います。ただ、ここで出てきますあぶは、マラリアを伝染させると言われており、恐れられていました。聖書では、敵の軍隊が攻めてくる様子を、あぶに例えて語ります（エレミヤ書四六章一三、一九～二一節）。

つまり主はこの奇跡を通して、主の軍勢がエジプトに襲いかかり、エジプトを滅ぼすと言われます。主に従わない、主に逆らい、心を頑なにすることは、主の軍勢によって攻められ、攻撃され、滅ぼされます。ですから、ファラオは主から逃げ続けるか、主に向き直って罪を悔い改め主を信じるかのどちらであるか問われます。

しかしファラオの取った行動は中途半端でした。ファラオがモーセを呼び寄せ、「行って、あなたたちの神にこの国の中で犠牲をささげるがよい」（二一節）と語ります。ファラオは、イスラエルをなおも自分の手元に置いておき、自分の権力の支配の下に置いておきたいのです。これは主の命令とは明らかに異なります。「この国の中で犠牲をささげるがよい」とは、エジプトにあって神聖視されていた牛や羊が生け贄に献げられることであり、イスラエルにとっては屈辱的で受け入れられません。そのためモーセは否と語ります（二二節）。

次にファラオは妥協して、イスラエルを荒れ野に解放すると語りますが、自分のためにも祈るようと要求します（二四節）。自分の権力を失いたくない、なおも権力を維持したいのです。こうした中途半端・妥協した行動を、キリスト者はとってはなりません。主を信じるとは、主にすべてを委ねることであり、主の御言葉に全面的に従うことです。

中途半端な信仰・妥協した信仰は、艱難が過ぎ去れば、信仰も失われます。ファラオがそうであり、場当たり的です。私たちが考えなければならないことは、なぜ、主がこのような奇跡を行われたのかです。あぶの襲来こそ、主の裁きを予見するものです。しかし、主はすぐさま、エジプトを裁くのではなく、エジプトが、そしてファラオが悔い改め、主に立ち帰るための猶予をお与えくださいます。このことは現在語られている御言葉の説教

も、まったく同じです。救いが語られている裏には主の裁きがあります。そして、まだ神を信じていない者が、悔い改めて、主に立ち帰ることを、主は待っておられます。

一方、第一サイクルとは異なったことが語られています。それはイスラエルを区別することです。「わたしは、わたしの民をあなたの民から区別して贖う」（一九節）。「区別して贖う」とは、「聖別」と言い換えてもよいでしょう。

つまり、頑なに主の御前で罪を繰り返すエジプトと、イスラエルとを主は分けられます。そして「贖う」とは「買い戻す」「救う」ことです。エジプト同様罪人であり、神との断絶の故に、死に定められていたイスラエルを、主が買い戻してくださり、神の子、救いに与る者としてくださることを、約束してくださっています。

主によって贖われた民は、主によって永遠の契約が与えられます。永遠に続く讃美、天国における祝福が、主によって贖われ神の子とされることにより与えられます。そして、この贖いの御業を私たちにもたらしてくださったのは、御子イエス・キリストです。イスラエルにしても、私たちにしても、このままの状態で、主に買い取られることはできません。主は聖・義・真実なお方であり、私たち罪を有している人間を買い取ることはできません。だからこそ、御子が仲保者になってくださり、私たちの罪を償ってくださいました。キリストの十字架の苦しみ、十字架における死こそ、本来、私たちが、主による刑罰として果たさなければならなかった刑罰です。この刑罰を御子が代わりに支払ってくださいました。だからこそ、私たちは、信じることにより義と認められ、神の子として主に贖われることが可能となりました（参照・ローマ書三章二一～二六節）。

「神の民の聖別」出エジプト記九章一節～一二節　　二〇〇六年一二月三日

私たちは、今、神を礼拝するために主の御前に集められています。クリスチャンであれば、毎週礼拝に出席することが当たり前です。しかし、私たちが礼拝を献げている神とはどういうお方であるのか、主の御前に礼拝を献げている私たちとは、どういう存在なのか、与えられた御言葉から確認したいと思います。

主はモーセがファラオの前で奇跡を行い、イスラエルの民の解放を求め、主の御力を示します。今日の御言葉は、第五・第六の奇跡です。第四～六の奇跡は第二サイクルです。ここでは、主が民を裁くこと、主がイスラエルの民を区別して贖うことが記されています。

さて第五の奇跡は疫病がエジプトの家畜に襲いかかります。「疫病」は、ペストやコレラ、最近であればSarsのように多くの死者を伴う伝染病ですが、罪に対する神の審判の一つです。ダビデ王は偉大な王ですが、罪も犯しました。最も有名なものは、ウリヤの妻バト・シェバとの姦淫、それに続くウリヤ殺害ですが、もう一つ挙げられます。人口調査を行うことです(サムエル下二四章)。これ自体は罪ではありませんが、ダビデは兵が多いことにより、自らが強くなったように思い、神の恵みと祝福を忘れる罪を犯しました。そしてこの時、主は三つの災いを示し、その内の一つ疫病によってダビデの罪を裁きます(二四章一三、一五節)。またルカ福音書二一章八～一一節では、疫病が終わりの日の前兆として語られています。

こうして主の裁きとしてエジプトに疫病がもたらされます。旧約聖書で主の御前に罪の赦しを求めるため動物の生け贄が献げられるように、動物は人の身代わりです。ここで主が人にではなく、家畜に疫病がもたらされるのは、まだ裁きに猶予があるからです。

つまり主には人を裁き、滅ぼす権限があります。言い換えれば、主が天地万物を創造され、人も創造されたのであり、人は主の被造物です。この関係性が理解されなければ、主なる神に礼拝を献げる行為が、形だけ、口だけの行為となってしまいます。

「ところで、あなたは言うでしょう。『ではなぜ、神はなおも人を責められるのだろうか。だれが神の御心に逆らうことができようか』と。人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、『どうしてわたしをこのように造ったのか』と言えるでしょうか。焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか」(ローマ九章一九～二二節)。

つまり私たち人間は、自分の意志により生きているようですが、主によって創造され、主を主権者とする主の被造物として生きています。ですから主が裁き、様々な試練を私たちに与えようとする時に、私たちは不平を語る以前に、創造主によって今日の命が与えられていること、生活に必要なすべてのものが備えられていることに感謝しつつ、なぜ主が裁き、試練が与えられているのかを考えなければなりません。

しかし人の心は頑なです。主によって命が与えられていることを忘れ、自分で生きていると思い込みます。主に礼拝を献げても、「自分が礼拝に出席している」との思いが強いです。そして試練に不平不満を語ります。ファラオも、第五の奇跡に続き、第六の奇跡において自らの身にうみとはれ物が出たにも関わらず、頑ななままです。

ファラオは自分の意志で、主に逆らい、頑なになっていきますが、それは同時に、主の意志でもあります(九章一二節)。主は天地万物を創造された時から、最後の時までのすべてを計画され、予定されています。そこに人の救いも含まれますが、それは同時に救われない者もいます(参照・ウェストミンスター信仰告白第五章六節)。

なぜ、このようなことを、主はなさるのでしょうか。ローマ書九章二二～二四節に答えが記されています。主に逆らい裁きをうける者たちは、主が救いの民を、真の創造者、統治者、救い主として崇め、礼拝するために用いるためです。ですから、エジプトに対する裁きがなされているこの奇跡において、同時に、イスラエルの民は、主による一方的に与えられた救いに入れられていることを確認しなければなりませんでした(九章六～七節)。

今、礼拝に集っておられる皆様は、どうでしょうか。本来ならば、疫病で死ななければならなかったエジプトの家畜のように、エジプト人もイスラエル人も、そして私たちも、死に値する存在です。それ程、私たちの心は頑なです。しかし、主は私たちの罪を赦し、救いに入れてくださるために、御子イエス・キリストをこの世にお送りくださいました。そして御子の十字架の血が、私たちに代わって流されました。だからこそ、私たちは裁かれることなく、救いに入れられています。そのため、私たちは救い主である御子イエス・キリストの誕生を記念するクリスマスをお祝いします。この備えの期間、アドベント（待降節）において、救い主の御前に立つ己の罪と格闘し、主に悔い改め、主から与えられた救いの恵みに感謝しましょう。

「主の名は告げ知らされる」出エジプト記九章一三節～三五節

二〇〇六年一二月一〇日

モーセによる奇跡も、第三サイクル第七の奇跡に入ります。第一サイクルで主の御力が示され、第二サイクルで罪の故に主の裁きがなされることと、主がイスラエルを区別して贖われることが示されました。そして第三サイクルでは、実際に人的被害、つまり警告に聞き従わなければ主の裁きがもたらされることが示されていきます。

ここで主が用いられる手段は雹を降らせることです。日本でも雹が降り、農作物などの被害が出たことが報道されます。しかし自然現象としてもたらされる雹での被害は、ごく限られた地域です。一方主が罪の裁きとしてもたらす雹は、エジプト全土で野にいるすべてのもの、人も家畜も残らず打ちます（二五節）。また、雹は旧約聖書の中にも度々、主の裁きとして登場します（ヨシュア一〇章一一節、イザヤ二八章二、一七節、三〇章三〇

節、三二章一九節、エゼキエル一三章一一、一三節、三八章二二節、ハガイ二章一七節）。黙示録においても最後に審判として雹が用いられます（黙示録一一章）。主を信じない者、主の御声に聞き従わない者は、主によって裁きがもたらされます。昨今、裁きを強調するとカルトと一緒にされるようですが、しかし聖書ははっきりと罪人の裁きを語っており、私たちは、自然災害が主の警告の一つであることを理解しなければなりません。

さて、主がこの雹の災いをもたらすことによって何を語ろうとしておられるのでしょうか。主はヘブライ人の神であり、エジプトで奴隷の苦しみの中にあるイスラエル人を救うために、今立ち上がっておられます。そして主なる神はおひとりであり、救い主は他にはいません。救いを求めようとするならば主を信じること以外に道はありません（一三、一四節）。

そして、主はファラオを今まで生かしておいた理由を語ります（一五、一六節）。主が繰り返し災いをもたらされることにより、主の御業が行われます。権威者は通常、自分に不利になることは、隠蔽しようとします。しかし、主はそれをお許しになることはありません。主はすべてを御覧になられ、主はすべてを明らかにされます。その上で、主はエジプト人に、主の御声に聞き従い、雹に打たれて死なないように逃げるよう命令します（一九節）。ここで主の御声に聞き従わない者は主の裁きとして死ぬのです。

今、二一世紀を迎え、日本のみならず、かつてキリスト教国であると言われたヨーロッパ各国やアメリカにおいて、主なる神を信じ、毎週、主の御前に礼拝生活を送っている真実なるクリスチャンが減っています。これは、主の御力・主の裁きが、人々に見えなくなり、主に対する畏れが消えているからです。死の恐怖、罪の裁きの意識がなくなってきているためです。そのため、主の御言葉が語られても、人々に聞き入れられません。

主は、日本において戦後六〇数年間もの間、平和と豊かさをお与えくださっています。戦争の恐怖、本当の意味での貧しさを知っている人が少なくなってきています。いわゆる平和ぼけです。そのため主による裁きがもたらされること、死の恐怖も希薄です。

そして死の恐怖がないからこそ、他国に対して戦争を起こす行動を取ります。自然災害同様に他人事に過ぎず、その場で戦争に巻き込まれている人々の恐怖を自らのものとして覚えることができません。人を殺す・殺される恐怖を知っていれば、武器を持つことなど考えられません。それ以前に武器を持たなくてもよい方法を考えます。そして主の裁きとしての死の恐怖がないからこそ、主の語られる御言葉が人々に届かないのです。

しかし主の裁きは、主の御言葉に聞き従わないすべての人々にもたらされます（二五節、黙示一一章一九節）。私たちは、イスラエルのように主が恵みによって裁きから免れさせてくださり、そして主の警告を信じて避難しなければ、主の裁きから逃れることはできません。

そして、この逃れの場に逃れることにより、主は、罪の故に裁きに遭うべき私たちを、御子イエス・キリストによる十字架の贖いと救いへとお招きくださいます。私たちは、私たちを救いに導いてくださったイエス・キリストの御降誕をお祝いするために、クリスマスをお祝いします。人々が主の御声にまったく耳を傾けない時代になっても、主の御言葉は人々に届けられ、主の御力は隠されることなど決してありません。そして、主の御言葉・主の救いを信じる者は、真のイスラエルとして、神の救いに入れられます。

主の御力と主の救いを信じて、主の御声に聞き従って行きましょう。

「語り伝えよ」　出エジプト記一〇章一～二〇節　　二〇〇六年一二月三一日

モーセによる奇跡もいよいよ八番目を迎えました。奇跡には、主の意志が込められています。それは第一に、ファラオとエジプトの民に対して、主の御力を示し、彼ら自身の罪を示し、悔い改めを迫ります。もう一つの目的は、イスラエルに対して向けられています。

それが一～二節で示されています。ここから二つのことを考えなければなりません。第一に、今これらの奇跡を目の当たりにしているイスラエルの民が、主の御力を知り、救いを知ることです。そして第二に、その救いの御業が与えられたことを、子孫に語り伝えていくことです。つまり奇跡による災いはエジプトにもたらされますが、一方この災いから逃れることが許されているイスラエルの民がいます。これは当然のことではなく、主の愛であり、主から与えられる一方的な恵みであることを、忘れてはなりません。

主はモーセの奇跡を通して、ファラオからイスラエルを解放し救い出してくださろうとしています。ですからモーセの後ろに立ち、「モーセ頑張れ・ファラオをやっつけろ」とモーセを応援しているだけではすみません。奇跡の傍観者ではいけません。イスラエルもまた、その主の御前に立ち、主の御力を受け入れ、ひれ伏すことが求められています。

私たち人間は、非常に愚かな存在であり、最初、主の御業が示された時には、驚き、その御業を受け入れ、信じ、主に従おうとします。イスラエルの人々も主を信じ礼拝しました（四章二九～三一節）。しかしエジプトで奇跡が行われている間、イスラエルは傍観者となっていたのではないでしょうか。しかし、主はエジプトを裁こうとしている以前に、イスラエルを救おうとされていることを忘れてはなりません。

エジプトのように、罪の故に滅ぼされていく人々がある中、主はあなたを召して、裁くのではなく、救いに導いてくださっています。そのために主は、御子イエス・キリストをこの世におつかわしくださり、御子はあなたの罪の刑罰としての十字架にお架かりくださいました。この主の救いが示された時、私たちは、主の御前に立ち、主を礼拝するに先立ち、どのような思い、どのような準備をもって礼拝に臨むのですか？　それでもなお傍観者として、主の御言葉を聞こうとはせず、他のことを考えているのですか？　主は今、あなたを救い、あなたに語りかけてくださっています。そこから耳を反らすのですか？

主は、続けて子孫に語り伝えるように命じます。信仰の継承です。私たちは自分自身の信仰すら弱くなります。なおさら世代を超えて、信仰が継承していくことは至難の業です。

だからこそ繰り返し語ります（参照・一二章二六節、一三章八節、申命六章四～九節、六章二〇～二五節、Ⅱテモテ一章三～一四節）。次の世代に信仰を継承していくことは至難の業です。教会で青年たち・子どもたちが減っているのは、はっきり言って信仰の継承が叫ばれながらも、失敗した結果です。子どもたちに、まず礼拝で物事一つたてない厳しさが語られた時、子どもたちは教会での居場所がなくなります。その上で、「神が救ってくださっている」と語られても、受け入れられません。まず、神の愛、神の救いが語られた上で、神の御前では静かにすることが教えられなければなりません。中部中会において、教会学校教案誌が作成されるきっかけとなったのは、信仰の継承に対する危惧からです。大垣伝道所でも、私自身もっと力を入れなければと思いつつできていないのですが、教会学校で、御言葉が熱心に、そして繰り返して、じっくりと教えられていかなければなりません。そのためには、スタッフが必要です。今後は、教会の体制を考えていくことも必要です。

それだけではなく、信仰の継承は、教会と共に家庭においても取り組む必要が求められます。それが家庭礼拝において福音が繰り返し語られていくことです。そのために聖書日課が用いられればと思いますが、それに頼る必要はありません。少しでも聖書を読み、一緒に祈り、神が共にいてくださり、救ってくださることを常に語ることにより、子どもたちは、主を受け入れ、信仰は継承されていきます。そのために、まず、あなた自身が、常に主の御前に立ち、畏れを持ち、主に遜り、ひれ伏し、主の御言葉に聞き従うこと、それが第一です。その次に、子どもたち・家族と一緒に御言葉に聞き、一緒に祈ることです。この基本的なこと抜きに、信仰の継承を教会だけに求めることはできません。

「頑ななファラオ」　出エジプト記一〇章二一～二七節　　二〇〇六年一月七日

八番目の奇跡において、家臣がファラオに対してモーセに従うように進言し（一〇章七節）、ファラオもモーセに譲歩をしようとしていますが（一〇節）、心の頑なさは無くなっていません。ファラオの姿は、私たちの姿そのものです。私たちは現状に甘んじていてはならないことが示され、変化が求められている時に、変化しようと考えつつも、頑ななお思いがあり、失いたくない思いが強いのです。そのため譲歩はしつつも、主なる神の語られることにすべて従うことはできません。

そして、主は最後の災いを前に、第九の災い（暗闇の災い）がエジプトにもたらされます。暗闇は、主の最後の審判を前に、私たちの姿を映し出しています（参照・マタイ二四章二九節）。ここでは考える発想を変えて頂こうと思います。真っ暗な闇の中にあって、イスラエルの滞在しているゴシェンの地域のみに光があたっています。つまり暗闇の災いがエジプトにもたらされているのですが、同時に主なる神によってイスラエルに光が与えられています。つまりこの第九の奇跡により、私たちは本来、闇の中＝罪の中にいることに気付かなければなりません。しかし私たちは、この闇を忘れています。大垣でも、この辺りは明かりが少ないのですが、それでも、真夜中でも道路の明かりは点いていますし、何軒かの家の電気は点いたままです。そして現在社会において、私たちは、光一つもない状態をまったくと言って良い程、体験しなくなっています。

神戸において、クリスマス・イルミネーションのルミナリオが始まったのは一九九五年です。つまり一月一七日に阪神大震災が発生した年です。その時の闇の姿を覚えつつ、復興の思いで始まりました。一二年という年月は、その闇を忘れてしまったかのようです。しかし、あの一月一七日の夜、それまで一〇〇万ドルと呼ばれた神戸の町が真っ暗になりました。私も経験しました。電気もガスも断たれ、市街は真っ暗でした。その中、余震におびえ、ヘリコプターの爆音と救急車のサイレンの恐怖を、今も忘れることはできません。

私たちは、この闇の恐怖を知らずに、光があることが当然の生活を送っています。それは裏返せば、文明の発達により人間には不可能なことはない、何不自由なく暮らすことを自らの手で勝ち取ったおごりの姿でもあります。これこそが私たちの闇の姿です。

そして主は、エジプトを闇で覆い、同時にイスラエルに光をお与えくださいます。この光は、前日まであった光と同じ光のようです。しかし、闇を知る者は、この光が主によって与えられていることを知っています。そして主は、闇（罪）の世の中を歩んでいる私たちに対して、救いという光を一方的にお与えくださいました。

そして、この主が私たちにお与えくださった光こそ、救い主イエス・キリストです（参照・ヨハネ福音書一章一～五節）。闇を照らす光がキリストによって与えられました。ロゴス（言葉）である御子は私たちに旧新約の御言葉をお与えくださり、主にこそ救いがあることをお語りくださいます。

光であるキリストが、私たちを救い出すために十字架にお架かりくださった時、昼の一二時頃から主イエスが息を引き取る直前の午後三時まで（参照・ルカ二三章四四節）、全地は暗くなり闇が覆います。キリストが十字架に架かり、闇が勝利を治めるように見えるからです。しかし主イエスが十字架の死を遂げる時、光が戻ります。キリストの死、それは敗北ではなく、罪・死に対して私たちに勝利がもたらされた瞬間です。

私たちはこの後、聖餐式に与ります。聖餐式でパンを食し、杯に与りますが、キリストの裂かれた体こそ、このパンによってしるしとされているものであり、キリストの流された血こそ、杯に盛られたぶどう酒です。私たちは、キリストによるサタンに対する勝利と私たちに与えらる罪の赦しと救いを覚えて聖餐式に与ります。このキリストの勝利は、キリストの死から三日目の朝に復活を遂げられ、甦りになることにより、より明らかになります。

主は、闇の中に歩む私たちに一方的に罪の赦しと救いをお与えくださいます。私たちはファラオのように、条件付きで主の御言葉に聞き従うので良いでしょうか？　そうではありません。主の御前に妥協は許されません。主が私たちに求めておられることは、主が御言葉を通してお語りくださることをすべて受け入れ、主の御言葉に聞き従うことです。

「最後の悔い改めの機会」　出エジプト記一一章一～一〇節

二〇〇六年一月一四日

主はイスラエルを解放しないエジプト・ファラオに対して、モーセによって九つの奇跡を行ってきました。私たちは一人で聖書を読んでいると、九つの奇跡は単調なことの繰り返しかに思います。しかし説教を通じて、主がそれぞれの奇跡を通して、読者である私たちに、異なったメッセージを語っていることに気が付かれたことかと思います。しかし、イスラエルを救う、そして頑ななエジプトを裁くという一点においては、まったくブレはありません。そしていよいよ最後の奇跡が行われようとしています。

主の裁きには例外がありません。終末における最後の審判では、主の救いに与ることのないすべての者が裁きの対象となりますが、ここでは初子に留まります。これはエジプトに対する最終的な裁きですが、一方にあって、最後の審判まで、最終的な裁きは憂慮されているからです。

そして最終的な裁きにいたる過程で、ファラオの家臣のように主の命令に聞き従う者も出てきます（八節）。もちろん彼らが主を信じて主の御言葉に聞き従ったというより、主の御力を受け入れざるを得ない状況に陥り、もうこれ以上の裁きを恐れて、主の御言葉に聞き従ったことでしょう。しかし、消極的な理由で、それ以外に道が閉ざされたことにより主を信じるように導かれる人たちもあります。そして主はそのことを通して、真の救いにいたる道を示し、主を信じることによる恵みと祝福に満たしてくださいます。

しかし、ファラオは最後まで心を頑なにし、イスラエルをエジプトから去らせません。主の最終的な裁きに入れられる者たちは、どのような主の奇跡、御業が行われ、力ある御言葉が語られたとしても、それを受け入れることはできず、信じることはできません。

それは最終的には、主が彼らに対して、主に振り向かせないからです。マタイ一三章一四～一五節において主イエスが語っておられる通り、最後まで頑なな人たちは、知的に主なる神の存在、主の御力、主による救いが理解できるかできないかではなく、見ざる、聞かざるであり、現実を見ようとも聞こうともしません。

つまり主なる神を信じて、主による救いを信じることは、霊的な事柄、奥義です。このことを世的な理屈で語ったとしても、その人の心が開かれていなければ、いくら語られても、受け入れられることはありません。主イエスも、癒やしや奇跡、そしてたとえ話を通して主の救いをお語りくださいましたが、主による救いに与る者たちのみが、主によってその心の目が開かれ、主の御言葉に従い、主を信じ、主による救いを信じるように導かれます。

このことは、私たちの伝道にも関係してきます。すべての人たちに福音を語り聞かせることが必要です。そのために、聖書が人々に普及し、読まれていくことは非常に大きな働きです。そのために私たちは伝道することが求められます。そのためにホームページも用いています。しかし、いくら福音が伝えられても、貝が殻を塞いでいるように、見る目、聞く耳を持たない人たちに、いくら語りかけてもダメです。少しでも関心を示し、御言葉を聞こうと耳を傾ける人に対して、主による救いを宣べ伝え、真理を伝えられることにより、福音が理解され、主を信じる者へと変えられていきます。だからこそ私たちは、むやみやたらに伝道するのではなく、同時に主によってその人の心の目が開かれるように祈り続けなければなりません。

しかしそれと同時に、主は私たちに希望の約束をお与えくださいます。「あなたたち（イスラエル）を一人残らずここから追い出す」（一節）ことです。主は御自身が救ってくだろうとしている人たちを、一人残らず救い出してくださいます。ここに私たちの希望があります。主の裁きには例外がありませんが、同時に、主の救いにも例外はありません。今なお頑な人たちであっても、主が救ってくださろうとしている者は皆、主によって救いに招かれます。

「主の過ぎ越し」　出エジプト記一二章一～二八節　　二〇〇六年一月二一日

私たちは、神によって罪が赦され、救いに入れられていることを覚えるために、礼拝・御言葉の説教と聖餐の礼典に招かれています。そして私たちが聖餐に与る時、すでに行われたキリストの十字架を顧み、このキリスト（メシア）の御業により救いが成就したことを覚えますが、旧約の民は、救い主であるキリストを待ち望んでいます。約束はされていても、はっきりとは示されていません。しかし、今日与えられた御言葉から、旧約の民が、主の過越を通してどのように救い主に望みを置いていたかを確認することができます。

主は、奴隷の身であったイスラエルをエジプトから解放し、救い出してくださいます。そして主はこの時を「正月にしなさい」と語ります。暦を支配することは、時の為政者の権力を示す最たるものです。ですから、日本でも天皇の支配を意識させるために「昭和」・「平成」と年号を用います。しかし主は出エジプトの時を一年の正月にするように定めました。世界は主なる神が支配しています。

また毎年主による救いを回顧するために、主の過越を行いなさいと、主は命じられます。正月を祝うのは、主がイスラエルと共にいてくださり、主が救ってくださることをイスラエルが覚えるためです。そしてこの時、主は傷のない一歳の雄の小羊を準備するよう命じます。傷は罪を象徴するものであり、傷のない小羊は罪のない聖さを示しており、この傷

のない小羊が献げることにより、イスラエルの民は、自分たちの一年間の罪の赦しを確認し、主による救いの民であることを覚えることができたのです。そして、その血を取って、家の入り口の二本の柱と鴨居に塗ることにより、主の裁きから逃れることが許されました。血は命を表します。主が血が塗られた家に主による命が賜っていることを確認したのです。

この時私たちは、キリストの十字架と重ね合わせて覚えることができます。私たちは、すでに私たちの罪の贖いがキリストの十字架によって成就しています。だからこそ、旧約の民のように、毎年繰り返して生け贄を献げることは、私たちには必要ありません。それは、旧約の民たちの罪の赦し・救いも、やがて来られるキリストの十字架によって、成就するのであり、過ぎ越しはその担保に過ぎませんでした。

また旧約の民は、家の柱と鴨居に血を塗ることにより主の過越を覚えましたが、私たちは聖餐式に招かれることにより、主による救いを覚え、最後の審判においても罪の裁きから逃れることが許されていることを確認します。

つまり、出エジプトとキリストの十字架、過越祭と聖餐式により、私たちは旧約と新約の連続性と相違を確認することができます。そのことはキリストの十字架前日の最後の晩餐が過越祭として行われたことからも理解できるかと思います。そして、主の過越、聖餐式を通して、イスラエルの民も私たちも、主による救いを覚えなければなりません。

主はエジプトを罪の故に裁きますが、柱と鴨居に血が塗られているイスラエルの家は、過ぎ越されます。イスラエルに与えられた救いこそ、キリストが再臨し、最後の審判が行われる時に、神を信じ、神によって召されたキリスト者に与えられる罪の赦しであり、救いへと結びつきます。主は、イスラエルの民を、そして神を信じるキリスト者を救ってくださいます。この喜ばしい事実を、私たちは忘れてはなりません（一四、一七、二四～二七節）。

儀式は、繰り返して行うことが求められます。しかし、その意味・意義が忘れ去られた時、それは単なる祭りになり、信仰は失われます。エジプトにあって、主が繰り返し奇跡

を行われ、最後に罪の裁きとして、エジプトのすべての長子が殺されます。その中、奴隷の民であったイスラエルの民は、過ぎ越され、救われます。この主の救いの御業を忘れてはなりません。私たちが礼拝中に主の晩餐を行うことも同様です。私は聖餐式のない週の週報にも、次にはいつ聖餐式を行うか、礼拝式順に書き込んでいます。私たちが主による救いを忘れないためです。エジプトで奴隷状態のイスラエルの民を主が救ってくださったように、主は、キリストの十字架の贖いにより、罪の奴隷の下にある私たちを救い出し、最後の審判において、神の国の永遠の祝福の恵みに満たされる約束があります。

「奴隷からの解放」出エジプト記一二章二九～四二節　　二〇〇六年二月四日

最後の奇跡は、今までの九つの奇跡と比べて非常に簡単に記され、その起こった事実のみが語られています。しかしこの最後の奇跡は、モーセを通してすでに預言されていました（一一章四～八節）。ファラオは、すでに九つの災いに遭っています。主がモーセを通して語られたことが実現することは理解できました。しかしファラオは、モーセの言葉に耳を傾けることはしませんでした。それは自分の死について語られていないからです。人は最終的には自分しかなく、自分の身に危険が迫らなければ、主の裁きの恐ろしさを知ることはなく、主の言葉に耳を傾けることはありません。

ですから主がエジプトの国のすべての初子を撃たれた時、ファラオは不意をつかれたように慌てます（一二章二九節）。真夜中に大いなる叫びがエジプト中に響くのですから、死んでいく者たちは、痛みに苦しみながら死んでいったことでしょう。そして死に行く人々を見た時、自分にも死がもたらされるとの思いへとかられ、パニックとなります。

ファラオも自分の身にも死が近づいたと思い、イスラエルがエジプトから即刻出て行く

ように命じます。自分の生命がかかっている時、今までのように目先の利益云々を考えている余裕すらなくなります。こうしてイスラエルによる出エジプトが始まります。

ではこの時のイスラエルの人々はどうであったでしょうか。ファラオのようにパニックには陥っていません。それは主なる神がすでに語られていた言葉に耳を傾け、その通り行動していたからです。主はイスラエルに、主の過越の祭りを守るように命じられ、小羊の血を家の入り口の二本の柱と鴨居に塗り、主の過越を見守るように（七節）命じられました。主はそれと同時に出立の準備をするように命じられます（一一節）。つまりイスラエルの民は、主の命令に聞き従い、エジプト人たちが裁かれていく時に、主が過ぎ越すための準備を行うと共に、いつでも旅立つことができるように準備を行っていました。

ここにエジプト人とイスラエル人との違い、つまり主による裁きに遭う者たちと主による救いに与る者たちの違いが生じてきます。主による救いを信じ、主が救ってくださろうとする民は、主が語られる命令に聞き従います。主の御言葉にこそ、真実であり、そのことによってもたらされる救いを信じているからです。

終末の時代、主による裁きと神の国を待ちわびている私たちもまったく同じです（ルカ一二章三五～四〇節）。キリストが再臨され、最後の審判がもたらされ、神の国が完成します。しかしこの時はいつ来るのか、私たちには示されていません。「主人が帰ってくる時」です。主人が真夜中に帰ってこようが、真昼に帰ってこようが、主人は帰ってきた時に食事の宴席を設けてくださいます。夜だから主人はまだ帰ってこない、最後の審判はまだ来ないと自分勝手な判断にいる者は、主人が帰ってきたことに気付かず、食事の宴席に着くことができません。だからこそ、私たちキリスト者は、いつ主人であるキリストが再臨され、神の国が到来しても良いように準備していなければなりません。

準備とは何か？　神を信じることです。神が御言葉である聖書を通してお語りくださる御声に耳を傾けることです。主に祈り求めることです。

だからこそ私たちは、主の晩餐に与るにあたり、主がいつ来られてもよい準備を行って

いるか、吟味することが求められます。それは私たちの信仰は、すぐに弱まり、主なる神から離れてしまうからです。聖餐式に与ることにより、主が私たちと共にいてくださり、キリストの十字架によってすでに救いが完成していることを覚え、その信仰が強められ、主が来られる時の準備を行うための備えを行ってくださっています。

人は通常、権力のある人、声の大きい人の語る言葉に聞き従ってしまいます。しかし、いくら権力がある人であっても一人の罪人です。ファラオの如く、主の御前に裁かれる者です。そのような者の語る言葉に聞き従うのではなく、主なる神が語られる聖書の言葉に耳を傾けることが、主によって求められています。条件付きで従えばよいのではありません。主の御前にひれ伏し、主の御言葉に聞き従うことが真っ先に求められています。主なる神は、イスラエル人をエジプトの奴隷から救い出してくださったように、私たちを罪・死の奴隷状態から救い出し、神の国における恵みと祝福に導いてくださいます。

「主の救いを覚える」出エジプト一二章四三～五一節　　二〇〇六年二月一八日

主はエジプトを脱出するイスラエルの民に対して、主による救いを忘れないために、過越の規定を定めてくださいました（参照・一二章一～二七節）。私たちは、主がお教えくださった過越の規定から、新約の教会に与えられている主の晩餐の恵みを再確認することができます。

今日のテキストには、まず誰が過越の食卓に与るかが語られています（四三～四五節）。聖餐式の場合、洗礼を受け信仰告白をした者に限られます。つまり洗礼を受けていない者、また幼児洗礼を受けていても信仰告白をしていない人たちは聖餐に与ることができません。旧約の民にとって過越に与ることができるのは割礼を受けた者に限られます。通常、イス

ラエルのみが割礼を施されており、外国人、滞在している旅行者、雇い人も割礼を受けていませんでした。従って割礼を施され主の民であることが、過越に与る条件でした。割礼こそが主の民としてのしるしであり、主による救いが与えられたことを覚えるために過越が行われるからです。しかし、割礼を受けることは、民族としてのイスラエルに与えられた特権ではありません。たとえ外国人の奴隷であったとしても、割礼を受けることが可能であり、同時に過越の交わりに加えられます。割礼を受け、神の民となることが大切です。私たちで言えば、信仰を告白してクリスチャンになるということです。そのことにより、主は、私たちの行動如何に関わらず、一方的な救いに導いてくださいます。

ここでもう一つ確認しなければなりません。過越においては、割礼を受けたすべての民が過越の交わりに加えられました。しかし新約の教会では幼児洗礼を授かっていても、自らの口で信仰告白をしない未陪餐会員は、陪餐を許されていません。他教派の教会では、幼児洗礼を授かっていれば聖餐に与る教会もあることはあります。さら現在では、私たちからすればキリスト教会から排除しなければならないのですが、洗礼を授かっていない求道者をも含めて礼拝に集うすべての者が聖餐に与る教会すらあるのが事実です。こういう教会が改革派教会であれば、戒規の対象、あるいは除名の対象になるかと思います。

ではなぜ改革派教会では未陪餐会員を聖餐から除外するのでしょうか。それは旧約と新約の違いにあるといわなければならないでしょう。出エジプトに立ち会った人たちが、エジプトには裁きがもたらされ、すべての初子が殺されていく中にあって、イスラエルの民たちが救われたことを直接体験しました。神からの特別な啓示が与えられていました。

一方、新約の時代に属する現在、主は私たちに御言葉である聖書を通して啓示してくださいます。それが唯一の啓示です。ですから、主による救いに入れられている民であっても、この啓示された御言葉を正しく理解することによって、初めて救いに入れられていることを覚えることができるのであり、キリストの十字架を想起することができます。

次に「あなたはその肉を家の外に持ち出してはならない」を考えましょう。これは出エ

ジプトにおける主の過越と深い関係があります。つまり出エジプトの時、エジプト人たちは主の裁きに遭い初子が殺されます。その時、家の入り口の二本の柱と鴨居に血を塗ったイスラエルの家のみが、主の裁きから逃れます。その時に、家の中にいた者たちが過越祭の晩餐に与かります。だからこそ、主の過越の恵みが外に漏れてはなりません。

主の晩餐は通常教会でのみ行われます。これは四六節の御言葉に由来しているからだとも言えます。私たちは未陪餐会員や求道者を礼拝から排除しません。また彼らに配餐を認めたりはしませんが、過越の食事の場合の外国人や奴隷と同様であると言えるでしょう。彼らがいずれは主の晩餐に集う者となることができるように祈りつつ、主の陪餐に臨みます。

過越の食事は、出エジプトを想起するのみでなく、約束された救い、キリストの十字架をも指し示しています。それが「骨を折ってはならない」（四六節）の御言葉によって暗示されます（参照・ヨハネ一九章三三～三六節）。通常の動物の生け贄では骨を折ります。骨を折らないのは過越の場合のみです。食する場合、非常に食べにくいです。しかしそのことにより、神との結合を覚え、足が折られることのないキリストの一つの体なる教会に属していることを覚えます。旧約の民たちは、すでに与えられた出エジプトの恵みを覚えつつ、これから与えられる主による救いを思い、過越の食事に集うことが求められました。それは、私たちが主の晩餐において、一方ではキリストによる救いを覚えつつ、今後与えられる神の国を願いつつ与ることと重ね合わせることができるかと思います。

「主の救いへの感謝」出エジプト一三章一～一六節　　二〇〇六年二月二五日

日本では古くからイエ制度が確立し、長男が家系を継ぐため大切にされてきました。近

年は、イエ制度は古いしきたりのようになってきましたが、なおも残っています。イスラエルやエジプトでも同様です。イスラエルでは、家系を遡りアブラハムと一二人の息子たち（一二部族）とのつながりを確認することが何よりも重要でした。そうした時代背景がある中、主はエジプトを裁くため、エジプトのすべての初子を殺します。つまりこれはエジプトのすべてに対する主の裁きです。その一方、主はイスラエルに生まれるすべての初子を聖別して主に献げることをお求めになります。初子を代表とするイスラエルの民全員が神の民です。家畜を生け贄にすることにより聖別されます。しかしロバは小羊をもって贖います（一三節）。ロバがイスラエル人に不可欠な動物であり、荷物運搬・乗用・農業に用いられ重宝されていたからです。主はイスラエル人の必要を知っておられ、聞き入れてくださるお方です。一方イスラエル人の初子も贖われます。「贖い」つまり代償の生け贄です。通常は一歳の雄羊一匹を焼き尽くす献げ物として（レビ一二章六節）、貧しくて小羊に手が届かない場合は、二羽の山鳩または二羽の家鳩を携えて行き、一羽を焼き尽くす献げ物とします（レビ一二章八、参照・イエスさまの贖い・ルカ二章二四節）。

「贖い」は、本来その命をもって支払わなければなりません。しかし主は小羊をもって代価とすることをお許しくださいました。つまり主にとって、イスラエルの民は、尊い存在です。命が奪われてはなりません。だからこそ代わりに犠牲に献げる動物が与えられます。そしてこの贖いによってイスラエルは主に買い取られました。所有は主にあります。それ故に、イスラエルは主によって永遠の生命と祝福に満たされます。

そして同じように、今、主なる神を礼拝している私たちを、主は愛してくださっています。本来ならば神の民として救われるためには、罪の償いとして私たち自身が十字架に献げられることが求められます。ところが主は、この私たちを神の民とし、罪を赦し救ってくださるために、御子イエス・キリストを私たちのためにこの世につかわしてくださいました。そして御子は、私たちに代わって十字架の苦しみと死を成し遂げてくださいました。

旧約のイスラエルの人々は、毎回、小羊による贖いが求められました。それはその贖い

が仮のものにすぎず、本来、神の民が贖われるべき唯一の生け贄として、神の子であるイエス・キリストが献げられる必要があったからです。キリストの十字架による生け贄がなされた故に、現在に生きる私たちは、小羊によって贖われる必要はありません。

また、エジプトからイスラエルを救い出してくださった主は、エジプトを脱出する道すがら酵母を入れないパンを食べることを求められます。パン種（イースト菌）が入っていないためパンは膨らまず、せんべいのようで美味しくありません。これは出エジプトにあたってパンを作り発酵することを待つことができなかったため、また腐りにくいパンが求められたからです。一方、後代の人たちは、過越祭において骨を折らないために食べにくい焼き尽くされた小羊を食した後、続く一週間は種の入っていない美味しくないパンを食べ続けなければなりません。主はイスラエルにこれらの祭りを続けるように命じられます。わけの分からないままに命じられたことを続けることは苦痛です。旧約のイスラエルの人々が堕落し、主の御前に罪を犯し続けたのは、祭りとして儀式を続けていましたが、その意味を理解せず行っていたからです。現在の教会の問題である契約の子どもたちが教会から離れることも同じ原因です。毎週礼拝に集うことが求められます。説教を聴くことが求められます。聖書を読むこと、祈ること、献金を献げることが求められます。いくら形を整えていても、なぜ神を礼拝するのか、理解していなければ、それは意味がありません。

だからこそ、イスラエルの人々は、この過越祭とそれに続く除酵祭を祝うにあたって、子どもたちに対して、このお祭りの意味をしっかりと教えて、伝えることが求められました。主なる神は今も生きて働いておられます。そして、イエス・キリストの十字架により私たちを贖い、神の所有とされ、神による神の国における永遠の生命と祝福に満たされることが約束してくださっています。エジプトの初子が裁かれたように、最後の審判で裁かれることはありません。神が私たちを贖い救ってくださったからです。だからこそ主の求めに応じて主を礼拝し、主の御言葉に聞き従い、感謝の応答として神に奉仕し、献金を献げます。

「主の導き」出エジプト一三章一七～二二節　二〇〇六年三月四日

皆さんは日々の生活の中で、神の存在を感じているでしょうか？　もしかすれば、日曜日に教会に来る時には神のことを考えるが、それ以外は、神の存在をまったく感じることなく生活しておられる方もおられるかも知れません。イスラエルの人々は、ヨセフの時代にエジプトにくだって以降、まったく神のことを忘れ、さらに奴隷としての苦しみを負っていたと言ってよいでしょう。しかし主なる神は、モーセを立て、一〇に及ぶ奇跡を繰り返し、エジプトを裁きを、イスラエルを救い出してくださいました。それがどれだけの期間に行われたか分かりませんが、この間イスラエルの人々は、主なる神の存在と神の救いを意識せずにはおれない状態に置かれたはずです。イスラエルの人々は、主が命じられた通り過越の準備を行い、そしてエジプトに対する主の裁きと共に、イスラエルは解放されました。そしてイスラエルは、約束の地カナンに向かって歩み始めます。

ところで奴隷から解放されたイスラエルは、自由が与えられ、各々が勝手にカナンに向けての歩みを始めたでしょうか？　私たちが考えるような好き勝手な行動は取りません。主による救いに与ることは、一つのゴールに向かっての歩みを始めることです。エジプトから解放されたイスラエルは、約束の地カナンに向けての歩みを始めます。そしてイスラエルを救ってくださった神が、イスラエルの行くべき道を指し示してくださいます（一七、二一～二二節）。奴隷から解放され救われることは、神の国に向かって歩むことです。そして、主はそのゴールである神の国に向かって歩む私たちを、力強く導いてくださいます。この主なる神の導きに従いなさいと、主は語られます。

この時イスラエルは、奴隷から解放された喜びと約束の地カナンに行ける希望によって、主に聞き従います。しかし人間は弱い者です。喜んでいる時、希望が見えている時には、主の御声に聞き従います。しかしそれが見えなくなると主なる神に対して不平を語り、主に逆らうようになります。あれだけ主によって数々の奇跡を見せられ、救われてきたイスラエルですらです。エジプト軍に追いつかれた時（一四章一〇～一四節）、食事に対する不平（一五章後半～一六章）、モーセがシナイ山に登り、帰ってこなかった時にはモーセに代わる指導者を求めて金の子牛で偶像を作ります（三二章）。

こうしたことがなぜ起こるのでしょうか？　イスラエルを守り、救い、導いてくださる主なる神を忘れるからであり、それは同時に主なる神こそが、ゴールである約束の地カナンに導いてくださる方であることを忘れるからです。

現在に生きる私たちはどうでしょう。イスラエルと常に共にいてくださった主なる神は、霊の導きにより私たちと共にいてくださいます。しかし目で見ることができません。耳で直接声を聞くことができません。奇跡を直接見たり、顕現もありません。自然科学は進歩し、情報がすぐに手に取ることができる現在、人々は目で見ることができないもの、耳で聞くことができないものを求めようとはしません。物事を非常に矮小化します。自分が納得することができることがすべてです。それ以外のことをすべて排除します。こうした状況が、言葉の権威をおとしめ、語られる言葉一言一言に重みがありません。言いっぱなしで責任を持ちません。そして、その自ら責任を持たない言葉が、今、インターネット上に氾濫しています。そういう状態の中、人々はさまよっています。最終的なゴールが見えないために、自分が納得する道、我が道を歩むのです。まさしく、今、この世にあって生きている私たちは、最終的なゴールを見失っている羊と同じです（ヨハネ一〇章）。

羊は、羊飼いがいなければ、さまよいます。そして、獣に襲われるか、飢え死にします。羊が安全に暮らしていくためには、安全な所、つまり囲いに導いてくれる羊飼いの声に聞き従うことが必要です。現在のこれだけ情報が氾濫し、言葉の権威が失われている中、私たちをゴールに導く羊飼いは誰でしょうか？　ゴールは、神の国（天国）です。そしてゴールである神の国に向かおうとすれば、私たちを神の国に導いてくださる神の言葉、つまり聖書に耳を傾けることが、私たちに求められています。私たちの羊飼いこそイエス・キリストです。主イエスは、私たち羊のことをすべてご存じです。そして受け入れてくださ

います。助けてくださいます。私たち羊がさまよい、滅びていくことを防ぐために、御自身がその砦となり、十字架に架かられました。私たちは、主イエスが十字架に架かり、踏み石になってくださったからこそ、羊の囲いに入り、獣から守られるものとなりました。

「絶体絶命からの救い」出エジプト一四章一～三一節　　二〇〇六年三月一一日

皆さんは、突然の困難が訪れた時、どのような行動をとるでしょうか？　多くの場合、目の前が真っ白になり、何も考えられない状態に陥ります。そして、人に責任を負わせたりして、自分は何とかその困難から抜け出せるようにどたばたします。

主なる神によってエジプトから解放されたイスラエルの人たちは、昼は火の柱に、夜は雲の柱に導かれていました。イスラエル人の思いとしては、奴隷から解放されたことに対する喜びもあったでしょう。特に、主が導かれる火の柱、雲の柱は、力づけられ、希望を持つことができるしるしであったはずです。しかしそれと同時に、今後どのようになるのだろうかという不安もありました。特に主が導かれた道は、通常、エジプトからカナンに行く時に通る道ではありません。こうした不安が頭によぎる中、主はイスラエルを解放したエジプト王ファラオをさらに心を頑なにさせ、全軍挙げてイスラエルを追って来させます（巻末地図二参照）。ラメセスを出発したイスラエルは最初南下しスコトに行き、その後バアル・ツェフォンに北上します。そして、地中海に面した葦の海の前に着きます。

そうした状況の中、イスラエルの人々は追い込まれます（九～一〇節）。絶体絶命のピンチです。人々は目の前のことしか見えません。物事を総合的に、幅広く、見届け、考えることができなくなり、視野が狭くなります。そして、本来ならば自分たちを奴隷状態から救い出してくださった指導者であるモーセを信頼して歩み続ければよいのですが、彼らはモーセに対して罵声を浴びせます（一一節）。この状態で、人々は苦しみに耐えていたエジプトでの奴隷状態の暮らしの方が良かったとさえ、思ってしまいます。

この時、主はモーセを通して答えられます。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」（一三節）。主は「落ち着きなさい」と語ります。「堅く立つ、しっかり立つ」と訳されている言葉です。つまり目の前の一つの状態に引きずられることなく、「あなたの立っている信仰の基盤とは何？　あなたを救ってくださった主なる神とは誰？　今こそ心を落ち着かせ考えてみなさい」と語ります。

つまりアブラハムを立て、信仰により救いに導き、モーセの時代にも一〇の奇跡、エジプトの滅び、脱出をお導きくださった主への信仰に立つことを主は求めておられます。

さらに主は「あなたたちは静かにしていなさい」とも語られます。興奮状態にある時、人は叫びます。怒鳴り声をあげます。押し売りや詐欺、マインドコントロールといったものは、人を興奮状態にさせ、何も考えさせずに、ものを購入させたり、自分たちの言うことを聞かせる状態に持って行きます。そうではなくて立ち止まり、静かに考えることが必要です。静思の時です。絶体絶命のピンチ、命の危険が迫っており、興奮状態にある中、いきなり静思の時を持つことは、困難なことです。しかし、立ち止まることにより、自分の立っている位置を確認する時、物事を客観的に判断し、主によって救われ、主によって守られている自分を取り戻すことができます。こうしたことを私たちが興奮状態の中で行うことは困難です。だからこそ、日頃から、私たちは御言葉に聞き、祈りを行い、個人礼拝、つまり静思の時を毎日、家庭にあって守り続けることが求められています。

絶体絶命のピンチにあるイスラエルは、主によって落ち着き、静かにする時が求められます。つまり、救い主である主に委ね、主に祈り求めることです。この時、主はイスラエルを救いに導いてくださいます。主の御力により、主は海を分け、道を作り、イスラエルを救い出してくださいます。主はイスラエルと共にいてくださいます。そして、主はイスラエルの祈りを聞き届けてくださいます。モーセは主を信じ、主にすべてを委ねたのです。

ヘブライ書一一章一～二、二九節に記されているような信仰が、私たちに求められています。いや、主なる神は、どのような時にも、私たちが主なる神によって罪が赦され、救われた喜びをもって、主と共に歩み、主に祈り、主にすべてを委ねて歩むことを願っておられます。救いの完成とは、キリストの十字架によって成就しますが、しかし神の国の完成は、私たちの救い、そして主が招いてくださるすべての民が救われるまで待っていてくださっています（同一一章三九～四一節）。だからこそ私たちがどれだけ絶体絶命の苦しみにある時であっても、主なる神が救ってくださいます。救い・逃げ道を私たちに備えてくださいます。

「主の救いを喜ぶ」出エジプト一五章一～二一節　　二〇〇六年三月一八日

主は、エジプトにおける初子の裁き、そして葦の海におけるエジプト軍への裁きにより、イスラエルを完全に奴隷から解放して救い出してくださいました。もうイスラエルが約束の地カナンに向かって進むことを阻む者はいません。主によって救われたイスラエルにとって、心の底から喜びが湧き出てきていたのではないでしょうか。喜びにより、讃美が生じます。

つまりイスラエルの人々は、主が生きておられること、主がイスラエルを救ってくださったことが、真の信仰の告白としての讃美の歌となります。

讃美の歌は信仰告白そのものです（二節）。率直な救いの喜びからでてきます。まだ、出エジプトにおける奇跡、葦の海の奇跡の光景が生々しく残存している最中の喜びが、この言葉に込められています。つまり、主なる神がイスラエルに対して奇跡を行い、救ってくださったことに対する信仰の応答としての讃美の歌です。

今、主の御前に礼拝を献げている私たちは、私たちを罪の奴隷から解放し、天国における永遠の生命に導いてくださったキリストの十字架の御業をはっきりと捉え、感謝しつつ礼拝を献げているでしょうか。つまり、キリストの十字架が自分の罪の赦しのためであったことがリアルになっているでしょうか。主が奇跡によりイスラエルを救い出してくださったように、キリストの十字架により主の御前に集う私たちは、罪の奴隷から解放されました。

私たちが神を礼拝することは、神から与えられる救い、恵みを受けるだけ、祈りの結果を求めるだけの一方通行ではありません。主によって救われ、祈りが聞き届けられた時、私たちは神の御業に対しての感謝の応答が出てきます。主なる神は、御言葉と説教により私たちに生きて働かれ、イエス・キリストの十字架による救いをお示しくださいます。救い・恵みは、神から一方的に与えられますが、この時私たちには、感謝の喜びが生じてきます。第一に礼拝讃美です。真の喜びに満たされ、心が燃やされるならば、その心が讃美にも表れてきます。小さな声でぼそぼそと歌うことにはなりません。かと言って、一人張り上げて歌うのでもありません。救いの喜びに与っている会衆の讃美としてのハーモニーを奏でることとなります。

神の救いに対する感謝は、第二に献金に表れます。会員に対しては月定献金と感謝献金・礼拝献金があります。会員であれば、月定献金を献げることは、信者としての義務です。しかし、月定献金も他の献金も、救いに対する感謝の表れです。金額を多く献げたから素晴らしいのではありません。献金を献げる心、行為が問われます（参照・ルカ二一章一～四節）。

神の救いに対する感謝は、第三に私たちの日々の生活に表れます。天地万物を創造され、すべてを治め、私たちの生命を司られ、救いに導いてくださる主なる神を信じているのであれば、日々の生活にあっても、神を意識した生活、主が語っておられる御言葉に聞き従う生活へと変えられていきます。「神を信じる」と口では告白し、毎週礼拝に出席してい

たとしても、教会から離れてしまえば聖書において主がお語りくださる御言葉からまったくかけ離れた生活をするのは、本当の意味で神による救いを信じる者とはなっていません。神の存在を自分の下に置き、そして神を自分の召使いの如くに、「救え」と言っているようなものです。「神ならば～してみよ」と命じるのも、その表れです。

そして、神の御業を信じ感謝し続ける者は、同時にまだ与えられていない主の約束をも信じる者とされます。すでに与えられた救いとこれから与えられる恵みがあります。海の歌においては、一三節以降の預言の讃美となって歌われています。ここには明らかに、約束の地カナンに入った時の状況が歌われています。彼らは、今すでにカナンの土地が見えており、主がお与えくださる信仰に立って、喜びの歌を歌っています。

一七節ではソロモンによってシオンの山に建てられる神殿が語られます。モーセとイスラエルの民が、約束の地カナン、そして神礼拝の場としての神殿の約束が与えられたことと同じように、キリストによる救いが与えられた私たちには、今、神の国の約束が与えられています。キリストが再臨された時、神の国が完成し、キリストにつながるすべてのキリスト者が神の国における永遠の生命に結ばれています。私たちはすでにキリストの十字架による救いに入れられ、神の国の約束が与えられています。

「不平、それとも祈願」出エジプト一五章二二～二七節　　二〇〇六年三月二五日

主の奇跡の御業によりエジプト軍から解放されたイスラエルは、主を讃美し、改めて約束の地カナンに向けての旅を始めます。旅において最初に問題となるのが水と食べ物です。主は、彼らの信仰を確認されようとされています。

葦の海を経ったイスラエルの民は、主の助けを信じて旅を始めます。そして水を得るこ

とのできない荒れ野にあってイスラエルは三日間耐えます。しかしようやく得ることができた水は、苦く、飲むことができなかったため、主に対する不平を語り始めます。

ここから、神を信じ、信仰を告白するとは、どういうことなのかを考えてみたいと思います。信仰とは、私たちの頭の中における単なる精神的なものではありません。主なる神が生きて働いておられます。そして主は民に示された約束を果たされるお方です。信仰とは主の御計画の成就を信じるかどうかと言うことです。頭で考え、頭で覚えるキリスト教であれば、信仰に現実味がなくなります。また、主の存在を信じていても、主の約束の成就を信じていなければ、主に対して疑い、不満が出てきます。

主の啓示を御言葉においてしか示されていない私たちは、信仰が精神化しやすいです。信じていたとしても、疑いが生じます。しかしその疑いが、主の奇跡が示されてきたイスラエルの民にも起ります。イスラエルは、主は生きて働き・救ってくださる方を信じていれば、苦い水しか得られなかった時点で、不平を語る前に、救い主である主に祈り求めたことでしょう。しかし彼らはそれができませんでした。そこに彼らが主の約束を信じることができていない信仰の弱さがあります。

イスラエルを救いに導いてくださった主なる神は、モーセを立て、モーセを通して一〇の奇跡を行い、イスラエルを救い、葦の海においてもエジプト軍を滅ぼすことによりイスラエルを救ってくださっただけではありません。主は、天地万物を創造し、そして人間を創造してくださったお方です。そしてすべてを治め、生きて働かれるお方です。そのお方がイスラエルを救いに導き、イスラエルを滅びる者としてではなく、永遠に生きる者としてくださいました。そして約束の地カナンに導き入れてくださいます。つまりイスラエルが生きるのも死ぬのも、主なる神によって与えられる恵みであることを信じているならば、今、苦い水しかない時、不平を語る前に、主なる神に祈り者とされます。そして、信仰を持つことにより、どのような苦難が訪れたとしても、主によって与えられる希望が示されているため、乗り越えることができます（参照・ローマ五章一～五節）。

水がないために不平を語るイスラエル人を前に、主なる神は、モーセに一本の木を示されます。モーセは主の御言葉を信じて、与えられた木を水に投げ込むことにより、イスラエルの民に甘い水を与えられます。この主なる神は、すでにイスラエルを約束の地カナンに導いてくださることを約束してくださっています。そうであるならば、荒れ野にあって困難な時にも、主は助けてくださいます。

そして、主はモーセに掟と法を与えくださいます（二五～二六節）。主は、イスラエルを奴隷から解放し、エジプトから救い出し、そして甘い水をお与えくださる方です。そのお方が、約束の地カナンに導いてくださることを約束されています。その主なる神は、イスラエルに対して、どのような時にも、主を信じ、すべてを主に委ねて祈りなさいと語られると同時に、掟と法に従いなさいと語られます。

人は、掟と法、つまり律法と語れば、守らなければならないものと考えてしまいます。これが律法主義につながります。しかし、主なる神が「イスラエルに掟と法を与える」と語る時、これはイスラエルを苦しめるものではありません。主はすでにイスラエルをお救いくださいました。そして、主がお与えくださる掟と法により、イスラエルは罪から離れることができます。ですから、イスラエルの民にとって、主がお与えくださった掟と法に従った歩みを行うことにより、主なる神から離れることなく、神の国に向かって着実に歩むことができます。

主は信仰を失いかけたイスラエルに対して、主が必要を満たしてくださるお方であることを示しつつ、イスラエルが信仰から離れることがないように掟と法をお与えくださいました。主の愛と恵みに心から感謝しましょう。

「天からの食べ物」　出エジプト一六章　　二〇〇六年四月一五日

今日は、有名なマナの話しです。新共同訳聖書になり、旧約ではマナのままですが、新約（ヨハネ六章三一、四九節、ヘブライ九章四節、黙示録二章一七節）での引用ではマンナになっています。

さて、主による力ある業により、エジプトから救い出されたイスラエルの民は、約束の地カナンに向けての歩みを始めました。喜びと希望に満ちていました。それが一五章の海の歌に表れています。この気持ちは嘘ではなかったでしょう。しかし、水が得られない不満を語り、さらに食事に対する不満を口にします。不満は、水・食料だけではありません。荒れ野をさまよい、どこへ連れて行かれるのかという不安もありました。喜び以上の不安と不満が渦巻いています。

しかし、彼らの不平に対して、主はすぐさま聞き届けてくださいます。それは主が生きて働き、イスラエルと共にいてくださるからです。主は、イスラエルの民に、毎日、夕にはうずらを、朝にはマナを与える約束をしてくださいます。

このマナの記事を読むにあたり、私たちが注目しなければならないことは、主の恵みの継続性です。マナは約束の地カナンに入るまでの四〇年間継続的に与えられました。それ以上に、主の恵みは、天地万物から神の国の完成にいたる全歴史において継続性があります。つまり、主はイスラエルを救ってくださいました。主の救いの御業は一回的な御業です。しかしそれで主の御業が終わったわけではありません。主が救ってくださった民は、主によって守られ、神の国に導かれるまで、主の加護・主の恵みの下にあります。

このことは、人が神によって創造された時にすでに定められていました。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる」（創世記一章二九節）。人は主の養いによって恵みが与えられ続けます。人が罪を犯すことにより、人は食べ物を得るために苦しむものとなり（創世

記三章一七節）、人は、食べ物を得るために、働き、労苦することが求められます。そして、主によって救われたキリスト者であっても、労働することが求められます。

では、出エジプトのイスラエルの民が、救われたと同時に、日々の糧も主がすべてを準備してくださったことは、何を意味しているのでしょうか。主は常にイスラエルと共にいてくださいます。そしてその生活のすべてをご存じです。その苦しみ、悲しみも知っておられます。だからこそ、その苦しみ・悲しみを自分一人で解決する必要はありません。主が解決してくださいます。主が養ってくださいます。そのために主を信じて、主にすべてを委ね、主に祈り求めることが、神の民に求められています。それは何もしなくても良いというのではなく、何をすれば良いのか、主が導いてくださるのであり、そのために主に祈り、主に委ねることが求められています（参照・主の祈り「日用の糧を今日もお与えください」）。

出エジプトのイスラエルの民に、うずらとマナが与え続けられたことは、主によって救われた民が、主に委ね続けることの必要を教えています。今日のマナは今日与えられるのであって、明日のマナは明日与えられます。主を信じることが求められています。

また、主を信じ、主の養いを信じることは、神の国における神の養いをも信じることにつながります。主は神の国では、キリスト者は朽ちないマナと白い小石（神の民としての名が記されている）が与えられます（黙示録二章一七節）。死からの復活によって与えられる永遠の生命は、朽ちないマナを信じることでもあります。

さて、出エジプト記におけるマナの記事には、もう一つ重要なことが語られていきます。それは、安息日の規定です。つまり、主がマナをもってイスラエルの民を養い続けてくださることは、イスラエルの民が主の安息日を守り、主を礼拝することとしっかりと結びついています。主の養いに対する感謝の応答としての神礼拝です。主による養いに対する感謝と喜びをもって、主を讃美し、礼拝する者へと促されています。ここに礼拝が繰り返される目的があるのであり、日々の養いの感謝が、改めて、救いの感謝へとつながります。

「主による戦い」　出エジプト一七章　二〇〇六年四月二二日

今日与えられた御言葉には、イスラエルが主を試みることと、主がアマレクを滅ぼされることが語られています。まったく二つの異なったことが語られているように思います。しかし、イスラエルの民とアマレク人が共に主に対して試み、主に対して戦いを挑むと言う点で、テーマは同じです。違いと言えば、神を知っている・信じているか、否かです。

最初に語られるのはイスラエルの不信仰です（参照・一五章二二～一六章）。イスラエルは、主の一方的な恵みにより、奴隷から解放され救われました。被造物であり、罪人である者が、主の一方的な恵みにより、主の愛によって救いに導かれていることを知らなければなりません。しかしイスラエルの民は、モーセと争い、主を試します。これは創造主・贖罪主である神と、被造物であるイスラエルの本来の関係ではありません。自分が主体となり、主なる神を自分が困っている時に、何でも助けてくれる召使い・奴隷のよう思っています。本来あるべき主従関係が逆転しています。このような思いにあれば、たとえ「神を信じる」と口で語っていたとしても、救われたことの感謝と喜びをもって主に従うことはありません。主の御言葉に耳を貸さず、主に対して不平不満を語り、主に要求をし続けます。そして主を試みます。こうした者は、自分の生活が順調であり、成功している時には、主に対して信仰を表しますが、一度、試練の中に陥ると、まったく主の御言葉に聞くことなく、主に対して攻撃的になります。

それでもなお、主は、イスラエルの不平を解消するため、必要な水をお与えくださいます。私たちは、身勝手な自らを省みつつ、主の変わりない愛・忍耐を覚えなければなりません（参照・申命記六章一六～一九節、Ｉコリント一〇章一～六節）。

一方、イスラエルの民により、主はアマレクを滅ぼされます。アマレクは、エサウの子孫で、シナイ半島に住む遊牧民であったと思われます。主なる神が異邦人である民を滅ぼ

されると聖書が語るため、主を信じることのない人々は、神が恐ろしい存在であると思っています。しかし、主なる神はそのような不条理なお方ではありません。主はアマレクの罪を指摘します（申命記二五章一七～一九節）。つまりアマレク人は、主の存在を否定し、主の民を否定して滅ぼそうとし、主を畏れることはありません。だからこそ、主はアマレクに刑罰を下されます。この主の刑罰こそ、聖戦です。創造者であり、すべての統治者である主なる神が、信仰と罪の故に、その判断を下され、民の裁きを行われます。「聖戦」とは人間が定義できるものではありません。ウェストミンスター信仰告白二三章二「新約のもとにある今でも、正しい、またやむをえない場合には、合法的に戦争を行なうこともありうる」と語りますが、「キリスト者である為政者が、その職務を遂行するにあたって、各国の健全な法律に従って、彼らは特に敬けんと正義と平和を維持すべきである」と語り、人が戦争を行うことに対しては非常に慎重でなければなりません。

従ってイスラエルがアマレクと戦うのですが、それはあくまで主の戦いです。モーセが神の杖を手に持ち、高く上げることは、神の旗印を掲げることを意味します。だからこそ、モーセの手が高く挙げられ神の杖が掲げられている時、イスラエルの戦いは、主が共に戦い優勢になり、手が下げられた時は劣勢になります。イスラエルは、自らの力で戦いに挑むのではなく、主なる神が戦ってくださっていることを覚えなければなりません。イスラエルが主にすべてを委ねる時、主はイスラエルに賜物と力をお与えくださいます。

従って私たちは、第一には主なる神を信じることです。それは、主が創造者であり、贖罪主であり、私たち自身は主の被造物であり、罪人であることを受け入れることです。私たちが神を粘土をこねるように造ったのではなく、私たちこそ主なる神によって創造され、命が与えられています。また第二に、主権者である主なる神は、私たちを愛していてくださり、恵みを与え続けてくださる方であることを信じることです。そうであれば、どのような苦難に陥ったとしても、主による助けを信じ、その場を耐え、主によって乗り越えることができます。そして第三に、戦いや試練にあっても、主が戦い、主が試練を乗り越える力を備えてくださいます。主に委ねることです。

「役割分担」　出エジプト一八章　二〇〇六年四月二九日

私たちは、神の民としてキリストの教会に属しています。父・子・御霊なる神を信じ、キリストの十字架こそが、自分自身の罪の赦しと救いのためであったことを信じて、信仰の告白を行うことにより、神の民とされます。そして、私たちは、神の民として、何よりも神の御言葉により救われ、御言葉によって生かされています。だからこそ、教会で奉仕に明け暮れ、神の御言葉に聞くことを忘れては、本末転倒になります。御言葉に生きることなく、奉仕を行う達成感によって生きることとなるからです。

しかしだからといって、「礼拝にさえ集っていれば良いのだ」というのも行き過ぎです。教会は、神の聖霊による働きによって形成されていきますが、そのために、主によって救われたキリスト者は、主の御声に聞き、主のための働き人として召されています。

今日、与えられた御言葉には、主によって立てられたモーセについて語られています。モーセは主に仕え、人々に御言葉を取り次いでいました。そしてイスラエルの先頭に立ち、荒れ野の旅を続けていました。さらに人々の相談を受け、また中立的な立場に立って人々の裁きの仲裁を行っていました。

しかしこうした状況を見たしゅうとのエトロ（口語章エテロ、新改訳章イテロ、別名・レウエル（二章一八等））はモーセに忠告します（一七～一九節）。ここでまず抑えておかないといけないことは、モーセがエトロの忠告を受け入れるということです。人の上に立つ者、権威・権力が与えられた者は、第一に主に対して誠実であることが求められます。主の御言葉に聞き、主の命令に聞き従うことです。そして第二に、人の語る言葉に耳を傾

けることです。人は得てして、権力を持つと、何でも自分の言うとおりになると思い、自分の考えを人に押しつけがちです。ここに人の罪が現れます。だからこそ上に立つ者も、まず人の意見を聞かなければなりません。そしてそれが正しく、納得の行くことであれば、語られた言葉に聞き従うことが求められます。

そしてエトロは具体的な提言をモーセに行います（一九～二三節）。まず神によって召されたモーセの行うことは、事件について主に執り成しの祈りを行うことです（一九節）。祈ることは、祭司としての努めです。これはモーセの本来あるべき努めです。第二に、彼らに掟と指示を示して、彼らの歩むべき道となすべきことを教える預言者としての努めです（二〇節）。そして第三に、大きな事件があったときは、裁きを行うことです。統治者、王としての努めです。

一方エトロは、モーセに代わる奉仕者を立てることも求めます（二一～二二節）。ここで十人隊長が語られていますので、一家族か二家族に一人です。つまり、家庭内で解決できることは、家長（十人隊長）によって解決しなさいと語ります。それができなければ五〇人隊長、一〇〇人隊長の所に持って行くのであり、町内会・教会単位と言って良いでしょう。

しかし問題を解決するために立てられる隊長は誰でも良いわけではありません。お節介な人、世話焼きの人は、どこにでもいますが、なりたい人が行えばよいのではありません。民全員の中から、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選ぶべきです（二一節）。つまり、神のことを信じて、神の御言葉に仕え、忠実な人でなければなりません。その上で、他人からも信頼される人でなければなりません。そうでなければ、たとえ裁きを行ったとしても、それが両当事者に受け入れられることはないからです（参照・使徒六章三節）。

ですから、私たちが教会を建て上げていこうとする時、主によって召された牧師が中心になります。しかしその一方にあって、長老・執事、その他の奉仕者も立てられ、牧師を

サポートする体制が整えられていく必要もあります。そうでなければ、牧師も本来の努めを行うことができなくなる状態に陥ります。

そのため、私たちが教会を形成していこうとする時、それぞれの働き人が立てられていくことが何よりも大切なことです。そのために、常に御言葉に聞き、主に従い、神を畏れ、人々から信頼されることが求められていきます。このように霊的に主の御言葉に聞き従う人々が、教会様々なの働きを担って行く時、キリストの教会は成長していきます。

「主による聖別」　出エジプト一九章　二〇〇六年五月六日

今まで、主はモーセを立て、モーセによりイスラエルをエジプトの奴隷の状態から救い出してくださったことが語られてきました。そしてこの救われたイスラエルが、救い主である神との契約を交わすこととなります。

モーセによって率いられたイスラエルは、エジプトを脱出して三か月目にシナイ山に着きます。この間、イスラエルは、主による救いに対する感謝を表しつつも、同時に、苦難の中、不平や不満を訴え、不信仰な姿も見せております。

しかし主なる神は、イスラエルの民に対して、愛のこもった言葉をかけてくださいます（三～六節）。主はここで、ヤコブとイスラエルの言葉を区別して語られます。彼らは、肉においては、アブラハム・イサク・ヤコブの子である一二部族につながる人々です。しかしそれは同時に、主によって神の子とされ、選ばれた民であるイスラエルです。

そして主はイスラエルに「あなたたちは見た」と語られます（四節）。何をか？　第一に、「わたしがエジプト人にしたこと」です（四節）。つまり主によるエジプトにおける一〇の奇跡です。特に、エジプトのすべての初子が断たれていく中、イスラエルには、主

の裁きが過ぎ越し、救い出されます。その後、ファラオ率いるエジプト軍が追って来た時も、主は海を分け、イスラエルを救い出し、追ってきたエジプト軍は滅ぼされます。ここに示された主の奇跡を、イスラエルの人々は否定することはできず、この事実を忘れてはなりません。

第二に、「また、あなたたちを鷲の翼に乗せて　わたしのもとに連れて来たこと」（四節）です。詩的な書き方ですが、荒れ野の旅にあって、必要な水を与え、日々のマナと肉を備えてくださっている主の御業と導きの確認です。「鷲の翼に乗せる」という表現は、主の力強さ・イスラエルに対する愛・慈しみを、鷲の強さ・速さ・雛に対する愛に例えます。

この愛なる主がイスラエルに契約を結んでくださいます（五～六節）。これは、主によって救われ、恵みの内に入れられているイスラエルに与えられる祝福です。主にとってイスラエルは「わたしの宝」です。主は天地万物を創造され、すべてのものが主の被造物です。その主が、「その中でもイスラエルこそが宝である」、「一番愛おしい」とお語りくださいます。

続けて主は、イスラエルは「祭司の王国となる」とお語りくださいます。イスラエルにとって王とは誰か？　それは主なる神です。つまり、イスラエルは主に直接仕え、神礼拝を行う民として召されています。被造物としての人間は、主によって創造された時、主を礼拝することを求められていたのですが、人が罪を犯すことにより、神から離れ、神礼拝を行わなくなります。しかし契約を結ぶ民は、この創造の秩序を再構築します。

そして、イスラエルは主によって「聖なる国民」とされます。イスラエル自身は、聖さはなく、罪深い者です。そのイスラエルが、キリストによる罪の贖いがなされ、義と認められ、聖とされます。つまり、主はイスラエルを一方的に救い出してくださったばかりか、霊的な祝福に満たし、神の宝として、神礼拝する者として、聖い永遠の生命を持つ者として召してくださいます。神学的に語れば、義認、子とすること、聖化です。これが、天地

万物を創造し、罪人を贖い、救ってくださる主なる神の結ばれる契約です。

この主の愛に対して、イスラエルの民は、「わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います」（八節）と語ります。これは信仰告白です。つまり、私たちが主を信じて信仰告白するのは、私たちがキリストの十字架を信じて、神による救いを獲得するのではなく、主なる神が、一方的にイスラエルに対して、そして私たちに対して、罪の奴隷状態から救い出し、日々の生活を守り・養い、かつ罪の赦しと永遠の生命の約束を行ってくださいます。この方向性を間違ってはなりません。

私たちを救いに導いてくださる主なる神は、創造主であり、贖い主です。天地万物を創造し、統治し、今も生きて働いておられます。その主が、モーセとイスラエルの前に顕現されようとされています。イスラエルは、畏れ敬うことが求められます。現在に生きる私たちは、この生きて働く主の御姿がぼやけているのではないでしょうか。少々のことは許されるという安易な思い、友だち感覚がありませんか？　イスラエルが、主の命令に反して、主の顕現されたシナイ山に登る者が死刑に処せられると語られ、それを受け入れたように、創造主・贖い主である主に対する厳格さが求められています。私たち人間は、あくまでも主の被造物です。生きて働く主の御声に聞き従うことが求められています。主の愛を知り、主による救いを受け入れた者は、同時に、主の求められる契約、つまり律法を全うすることが求められています。

「十戒の目的」　出エジプト二〇章一～一七節　　二〇〇六年五月一三日

私たちは、毎週十戒を朗読します。「十戒」は、一〇の戒めと書きます（英語でも同様）が、原典のヘブライ語は「十のことば」と語ります（三四章二八節）。「戒め」だと、守

らなければならないものという束縛的・律法的な言葉となり、本来、主がお語りくださった愛のこもった言葉ではなくなるのではないかと思います。神の愛は、序文からも確認できます。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。一九章では、イスラエルが主による救いとエジプトの裁きを見たことを確認させ、その主が、あなたたちはわたしの宝となり、祭司の王国、聖なる国民とすると約束してくださいました（一九章三～四節）。十戒を読む時、私たちはこの序文があることを、忘れてはなりません。

そしてこの序文は、私たちにも語りかけています。イスラエルは、肉的にエジプトの奴隷であったものが、主によって解放されました。同様に、私たちは霊的に罪の奴隷の状態に置かれ、罪の刑罰としての死に捕らわれていましたが、主は私たちを、この罪の奴隷の状態、死から解放してくださいました。それが主イエス・キリストの十字架です。そしてキリストの御業の故に、私たちに罪の赦しと永遠の生命をお与えくださいます。

イスラエルと私たちを罪の奴隷の状態から救い出してくださった主が、十のことばを語ろうとされています。その時に、人を縛る言葉を語られるでしょうか？　そうではありません。つまり主は十戒を守ったら救われるとはお語りになっていません。すでに救われているあなたたちが十戒を守るように語られます。つまり十戒は、主によって救われているイスラエルの民が、真理の道から離れないようにするために与えられている言葉です。

主イエスは十戒の要約として次のようにお語りになっています。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』。律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」（マタイ二二章三七～四〇節）。ここに主の愛があります。主によって愛された者が、主を愛し、さらに周囲のすべての人々を愛するために行うべきことを、お語りくださっています。

ちょうど親が子どもに対して躾（しつけ）を身につけさせていくことと同じです。躾は、

子どもを愛するが故に、誤った道を歩まないようにするために、また独立して生きていくためにも必要です。「子どもが可哀想だから」怒らないというのは、本来あるべき姿ではありません。十戒で語られていることばは、まさしくこうした子どもを愛する親の心で、神の民とされた私たちに対して、父なる神がお語りくださいました。そうであれば、「私たちは十戒をただ守ればよい」と語られているのではないことも、ご理解していただけるでしょう（参照・「金持ちの青年」マタイ一九章一六～二二節）。

つまり、主は私たちが十戒を守ることができるから守りなさいと語っておられるのではありません。私たちは罪人であり、主がお語りくださる教えから外れていくのです。知らなければ、行いません。だからこそ正しい道を歩み、そこから外れないようにするために、十戒・律法が与えられています。自分は十戒を守り得ない存在であることに気が付かなければなりません。主の聖・義・真実に照らした時、私たちは誰一人、行い・言葉・心において主の律法を完全に全うすることができる者はいません。だからこそ、この青年のように形だけ取り繕っていても、主によってその嘘が暴かれます。心の奥底は他人が見ることのできないため、だますことはできたとしても、主なる神は私たちのすべてをご存じであり主を誤魔化すことなどできません。

主は、主の義・真理を全うすることができない罪人である私たちを、奴隷の状態から救い出し、永遠の生命に定めてくださいました。その上で、さらに奴隷の状態に戻らないように、救いの道として、十戒という愛のことばをお与えくださいました。

私たちは、信仰を告白し、神の民とされています。神の民は、与えられる神の国では完全に聖・義・真実であり、罪は除去されています。こうした聖・義・真実となる神の民にふさわしい歩みを、私たちはこの世でも行うよう主によって求められています。

「私たちの義務」　出エジプト二〇章一～一七節　二〇〇六年五月二〇日

先週に引き続き十戒について取り上げます。前回は、十戒は主の愛のこもった言葉であり、救われた者が主の道を歩むために与えられたものであることを語りました。

それでもなお、私たちが十戒を読む時、これは戒めとして聞き従うことが求められています。つまり私たちは律法主義者ではないのですが、かつ律法廃棄論者でもないということです。律法廃棄論とは、律法を一切廃棄されたものと考え、良く言えば自由気まま、言い換えれば人に迷惑さえかけなければ何を行っても良いと言った考え方です。もう救われたのだから、何を行っても救いから漏れることがないという傲慢さです。主イエス・キリストの十字架によって、救いが成就し、旧約聖書の律法がすべて廃棄されたと主張する立場です。

律法主義ではなく律法廃棄論でもないことは、改革派教会の創立宣言でも語っていることです。創立宣言では私たちが地上に見える教会を建て上げるために三つの必要を語ります。一つ信仰告白（ウェストミンスター信仰告白、大・小教理問答）、一つ教会政治（長老主義の教会規程）、一つ善き生活です。この善き生活において、「我らは律法主義者にあらず、また律法廃棄論者にあらず」と語ります。

では、私たちキリスト者は、道徳律法である十戒をどのように用いていけば良いのでしょうか。通常、律法には三つの用い方（用法）があると語られています。

第一の市民的用法とは、一般に私たちが日本に住み、法律が定められ従うことが求められていますが、こうした法律である社会秩序は、この律法を適用しています。これは創造の秩序に遡るもので、主は全世界を統治されています。そして主の恵みが、神を知らない人たちにももたらされます。ですから、神の御言葉が世に示されていかなければ、社会は歪んできます。通常、倫理の授業などで学ぶ時には、十戒で言えば第五戒以後の第二の石の部分のみを採用します。つまり律法（十戒）は、刑罰が与えられるという警告によって

不信心な者の心を抑制し、社会悪を阻止し、また正義と安全とを保証し、善を推進します（Ⅰテモテ一章九～一〇節）。

第二は教育的用法です。これはキリスト者、あるいはキリスト者になろうとする者に対して、罪の規準を示し、自分が神の御前に罪人であることを悟らしめ（ローマ五章一三、二〇節、ガラテヤ三章一〇節）、罪に対する神の怒りを宣言し（ローマ四章一五節、七章一一節）、キリストによる救いを求めさせる働きを行います（ガラテヤ三章一四～一五節）。

第三が倫理的用法です。改革派教会では善き業を語り、この第三用法を重視いたします。私たちキリスト者は、キリストの十字架の御業の故に、贖われ、滅びから救い出されました。しかし、私たちはなおも罪人であることを忘れてはなりません。第二用法で自らの罪を知るだけではなく、さらにキリストの模範に倣って生きることが求められています（ガラテヤ六章二節）。つまり、律法はキリスト者と無縁なものになったのではなく、逆に信仰者の生活の規範として機能を持ち続けています（マタイ五章一六節、エフェソ六章二～四節、ヤコブ二章八～一三節）。これが善き業となり、聖化の歩みとなります。

ですから私たちは、「律法を守らなければ救われません」とは語りません。しかし、律法を無視して良いとも語られていません。神の愛の故に救われた者として、感謝と喜びをもって主に仕え、律法に従う者とされています。私たちの目指しているのは神の国です。神の国には罪はなく、主による聖・義・真実のみです。私たちはそれにふさわしい歩みが求められています。そうであれば、地上の生涯においても、神の民にふさわしい者とされています。私たちはキリストの十字架によりすでに罪赦されましたが、なおも罪人です。だからこそ、主は主の律法により、またキリストの生涯に倣うことにより、神の民にふさわしい歩みができるようにしてくださっています。

さらに私たちが主の御言葉に聞き従い、善き業を行うことにより、主を信じていない社会に対しても、真理を示し、社会秩序の安定へと促す力が与えられています。これは主が

創造時に、全被造物を治める者として人を作られたことに合致した歩みとなります。主の御言葉に聞き、律法に従う歩みを行い続けましょう。

「神の御前に立つ私たち」　出エジプト二〇章一～一七節　二〇〇六年五月二七日

私たちは、主がモーセを通してイスラエルの民たちにお与えくださった十戒を、読み進んできました。繰り返しになりますが、十戒は「～しなければ救われない」と言った懲罰的な戒めではなく、主が救ってくださった民に対して、主の道を歩むために必要な愛のこもった言葉であることを確認してきました。つまり、主によってエジプトの奴隷の状態から救われたイスラエルの民も、また罪の奴隷の状態から救い出された私たちも、もうすでに神による救いは成就しています。だからこそ私たちは、主がお語りくださった律法を守らなければ救われないということはありません。否、前回語りました通り、私たちは、主の聖・義・真実に照らした時、この十戒のどの戒めの一つをも行い・言葉・心において完全に全うすることができない存在です。にもかかわらず、主は、イスラエル対しても、私たちに対しても、罪を赦し、救ってくださいました。その上で、主は、主の聖・義・真実を全うするために、キリストに倣うために、何が必要であるか、どのようにすれば神の民としてふさわしく生きることができるのかを、十戒によってお示しくださっています。

ここで私たちは、私たちを救ってくださった主なる神と私たちとの関係を顧みる必要があります（一八節）。イスラエルの人々は主の御前に立つ時、「死んでしまいます」と語ります。つまり、イスラエルは主の語られる律法に対して、自らが従い得ない罪人であることを認めています。そして、主の聖・義・真実を認め、主の御前に立つ時、イスラエルは裁かれ殺されるのではないかと思うのです。こ

れはちょうど、主によって天地万物が創造された時、最初の人アダムとエバが、主の御前に罪を犯した時と同じです（創世記三章八～一〇節）。彼らは共に、主の御前に立つ時に、主による裁きが行われることに対する死の恐怖があります。だから主を畏れます。

この畏れが私たちにとっても必要です。主の存在がぼやけてしまえば、主の裁きも絵物語となってしまい、信仰は思弁的になります。そうなれば、主への畏れはなくなり、主の御言葉に聞き従うことも律法的になります。

一方、主を畏れるイスラエルに対して、「恐れることはない」とお語りくださいます（二〇節）。主の存在・主の御力を受け入れ、主の御前に立つ己が罪深い者であること、主が己の罪を赦してくださっていることが示されれば、主を恐れることはなく、主への感謝と主に従い行く思いが出てきます。主の存在にリアリティがなければ、信仰は無に等しいのです。頭の中だけの信仰は思弁的になり、形だけのクリスチャンとなります。

今の時代、聖霊の働きはありますが、直接主の存在を感じることが希薄になっています。神存在に対して、鈍感になっています。神存在の程度が信仰にも表れてきます。本当に、主の存在（リアリティ）があれば、主の御前に立つことの畏れを持ち、主なる神を礼拝する時の態度が整えられます。主の礼拝を疎かにすることは、主なる神の御前に立っていないからです。あるいは、このくらいは許されるだろうという甘えとなります。友だち感覚です。主なる神の存在感がありません。主の裁きがない、直接的に示されることはない、これが現代人の信仰の弱さです。主は「アバ父よ」と祈ることをお許しくださっています。しかし、その前に、主の御力、主の愛を知らなければなりません。

旧約のイスラエルでは、直接主の裁きがイスラエルと諸国にもたらされました。そして主イエスの時代も、主の御力を人々は受け入れました。そして、二〇〇〇年にわたる新約の時代、人々は、戦争や天変地異、様々な恐怖の中に、主の裁きを見てきました。主の偉大な御力を知り、主の救いを受け入れてきたからこそ、信仰が受け継がれてきたのです。

しかし二一世紀を迎えた現代、科学が発達し、様々な自然現象が解明されています。通

信技術の著しい発達により、世界の出来事がすぐさま分かる時代となりました。こうして人々は、神に対する恐れも無くなりました。そして主の御前に律法に聞き従うこともなければ、社会秩序を整えていく力も小さくなってきました。

今、私たちに地震や自然災害、迫害、戦争、災難がもたらされていないとすれば、それは主の恵みによるものであり、私たちは、主の御力をもってすれば、いつでも主の裁きがもたらされることをも忘れています。ここに平和ぼけがありますが、ここに主のリアリティが欠けている原因もあります。私たちは、今ある平和・幸福を主に感謝しなければなりません。さらに主の御前に生きる者として、畏れも必要です。主の御力、主の救い、主の守り、これらを主に感謝しつつ、神の御前に生かされている者として、主に仕え、礼拝中心の生活を行っていきたいものです。

「主をのみ礼拝せよ」　出エジプト記二〇章二二～二六節　二〇〇六年一一月二二日

表題に「契約の書」と記され、その後二三章まで、それぞれの契約が記されていきます。十戒そのものが神から与えられた契約であり、二〇章二二節以降の契約は、十戒を肉付けしたものと考えることができるかと思います。

十戒の解説としては、ウェストミンスター小教理（同大教理はさらに詳細です）においては、積極部分（求めていること、服従）と、消極部分（禁じていること、禁止事項）が記されています。私たちは、この教理の学びにより、十戒について学ぶこともできるのですが、主がお語りくださる御言葉を通して、当時のイスラエルの民に具体的なことを語られていることから聞くことも非常に大切なことです。

契約の書の最初の御言葉として、偶像崇拝と祭壇について記されています。これらは共

に礼拝に携わることであり、最も重要なこととして、最初に記されています。

私たちは、十戒の第二戒において「刻んだ像を造ってはならない」と語られる時、偶像を造ってはならないことを第一に考えてしまいます。しかし、私たちは同時に、主なる神を偶像としてはならないことも、確認しなければなりません。三二章で記されている金の子牛がそうです。また現在においても、カトリック教会などにおけるマリア像や聖画なども、偶像と化することから、改革派教会ではそうしたものを教会に置くことはしません。銀の神々、金の神々と語られていきますが、人間的に価値あるもので像を作ることは、人間的な権威を与えることとなり、主はことごとく禁じておられます。

ここで語られているのは、造られた像のみですが、神格化した人間もまた同様に神となり得ることを、私たちは忘れてはなりません。現在の北朝鮮がそうです。また日本は、戦時中、天皇を神としました。そしてキリスト教会もそれを受け入れました。キリスト者として歩み続ける以上、偶像との戦いは付きまといます。生きて働き、イスラエルを救い、私たちを罪から救い出し、永遠の生命をお与えくださる主なる神のみを、私たちは礼拝し、讃美しなければなりません。

もう一つの規定が記されています。祭壇の建設についてです。現在でいう会堂建築につながることですが、ここでも中心は、神礼拝とはいかなるものかです。会堂建築においても、一番重要な課題は礼拝堂でどのような礼拝が捧げられるかです。旧約の時代ですから、まだイエス・キリストの十字架の贖いが成し遂げられておらず、動物による生け贄が行われていました（参考・幕屋建設の指示、祭壇の建設の指示二七章一～八節）。祭壇は石そのものか土で造ることが要求されます（二七章はアカシア材）。違いがありますが、主が語ろうとされる意図は一つです。生け贄は、キリストの生け贄を指し示す影であり、本体ではありません。旧約に生きる彼らも、キリストの十字架によって罪が赦されます。それを生け贄は指し示すものに過ぎません。つまり、祭壇に献げられる生け贄はあくまでも一時的なものであり、メシアであるイエス・キリストを礼拝することが求められます。一方、

切り石で祭壇を造るは、偶像化することが危惧され、禁じらます。

最後の祭壇の階段について付け加えられています。祭壇には、ある程度の高さがあり、人々の見える場所で生け贄が献げられていたのでしょう。唐突に記されているように思えます。しかしこれも神礼拝に関係することです。神礼拝をする時、私たちは霊的に整えること、礼拝に出席するための服装を整えることが求められます。ここで語られていることは服装を整えることです。つまり神礼拝にふさわしい服装とは、自分が目立つような服装ではなく、主の御前に謙虚になり、神の御言葉を聞くことに集中することができるものでなければなりません。主の御前に立つことを真剣に求め続けるならば、最もフォーマルな服装が求められます。では階段と服装に何の関係があるのか？　階段を上り下りすることにより、祭服の裾がはだけ、隠し所が露わになることがあります。祭司は、身だしなみには注意をするはずですが、不要な性的な欲求をもたらすことがないよう、神礼拝の場では注意しなければなりません。ここでの規定は、そうした主からの助言です。